

黒谷語録  
(和語)  
釈文

## 凡例

元亨版『和語灯録』を現代的な表記に改めたものである。改めた内容は、一、仮名遣いを現代的仮名遣いに改め、二、漢字表記を変更し、三、引用の漢文を讀下す、の三点である。「詞書」で適宜原形を確認されたい。

(一) 元亨版『和語灯録』(以下、元亨版)の仮名遣いを現代的仮名遣いに改めルビを付し、音読する場合の実際の音を表記するように努めた。

(二) 音便の表記についてもこれに準ずる。ただし元亨版の表記を残した場合がある(例えば「いは」は「いっは」が促音化し「いっば」となったものの促音「っ」が表記されていないものと考えられるが、これについては元亨版の表記どおり「いは」とした)。ただし漢字表記に対するルビと漢文訓読ではこれによらない。

(三) 元亨版には多くの音訓点が付してあるが、後の加筆であり問題のある読み方も少なくない。よって釈文においてはこれを参考にしていない。

(四) 漢字表記は基本的に常用漢字に改めた。

(五) 仮名表記を漢字表記に改める場合は、そのルビはすべて元亨版の仮名表記の通りとした(例えば「阿弥陀仏」のルビを「あみだほとけ」とした場合)。

(六) 漢字表記を仮名表記に改める場合および漢字表記に対するルビは、当該語の仮名表記が元亨版にある場合はそれによる(例えば「熊谷」のルビを「くまがや」とした場合など)。

(七) 漢文の引用は、文脈上漢文のまま残すべきであると判断した場合を除き、すべて讀下した。その際、『浄土宗聖典』一―三巻に当該文がある場合には原則としてこれに依った。ただし句読点の位置など、従わなかった場合もある。また数種類の読み方が行われている場合は、正徳版『和語灯録』(正徳五年刊)などに示される訓読文を用いた場合もある(例えば自信偈)。

(八) 引用文や会話などについて、その範囲を限定しにくいものについては「」で括った場合がある。また巻一所収の『三部経釈』で「弥勒菩薩(に)この経を」と(一)を使用したが、これは編集者の付加であることを示す。

黒谷上人語灯録卷第十一 并序

厭欣沙門了惠集録

浄機純熟

聖徳太子

静かに以れば良医の薬は病の品にて顕れ、如来の御法は機の熟するに任せ  
 て盛なり。日本一州、浄機純熟して、朝野遠近みな浄土に帰し、緇素貴賤こ  
 とごとく往生を期す。その濫觴を尋ねれば、天国排開広庭、天皇御世に百済国  
 より釈迦、弥陀の霊像始めてこの国に渡りたまえり。釈迦は発遣の教主、弥陀  
 は来迎の本尊なれば、二尊心を同じくして往生の道を弘めんがためなるべし。し  
 かねば小墾田天皇古の御時、聖徳太子、二仏の御心に随わせたまいて、七日弥  
 陀の名号を称して相王明の恩を報じ、御文を善光寺の如来へ奉りたまひしかば、  
 如来みずから御返事ありき。太子の御消息にいわく、  
 名号称揚すること七日已りぬ。これはこれ広大の恩を報ぜんがためなり。  
 仰ぎ願わくは本師弥陀尊、我が済度を助けたまひ常に護念したまえ。  
 如来の御返事にいわく、

一念の称揚、恩として留まることなし。いかにいわんや七日の大功德をや。  
 我衆生を待つこと心間なし。汝よく済度す、あに護らざらんや。

太子たいしついに往生おうじやうを異境いきやうに現あらわして、利益りやくを本朝ほんちやうに示しめしたまひき。

その後大坎天皇のちのおおのいてんのうの御時おんとき、弥陀觀音みだかんのん、化けし來りて極樂ごくらくの曼陀羅まんだらを織おり現あらわして往生おうじやうの本尊ほんぞんと定め置おきたまう。ここに六字ろくじの功德くどくほほ顯あらわれて二尊にそんの本意ほんいようやく弘ひろまりしかば、行ぎやうき基菩薩ぼさつじ慈覺かくだいし大師等だいしとうの聖人しょうにん、みな極樂ごくらくを欣おがいて去りたまひき。惠え心僧都しんそうずは楞嚴りやうごんの月の前つきまえに往生おうじやうの要文ようもんを集め、永觀律師ようかんりつしは禪林ぜんりんの花の下はなのもとに念仏ねんぶつのじやういんえいを誦おののじやうとおののじやうと、各おののじやうと淨土きやうどの教きやうど行ぎやうを弘ひろめたまひしかども、往生おうじやうの化道けどういまだ盛さかりならざりしに、なかごころ黒谷くろたにの上人しょうじん、勢至菩薩せいしぼさつの化身けしんとして始はじめて弥陀みだの願意がんいを明あきらめ、専もはら稱しょう名みやうの行ぎやうを勸すすめたまひしかば、勸化かんげ一天いつてんに遍あまねく、利生りしやう万人ばんにんに及およぶ。淨土じやうどという事ことはこの時ときより弘ひろまりけるなり。しかれば往生おうじやうの解行げぎやうを学まなぶ人ひとみな上人しょうじんをもて祖師そしとす。

法然上人

淨土宗

異流

「和語灯録」編纂

ここにかの流ながれを汲ひむ人多なかき中に各おののぎ義ぎを取とる事こと区まちなり。いわゆる余行よぎやうは本願ほんがんか本願ほんがんにあらざるか、往生おうじやうするやせずや、三心さんじんのありさま、二修にしゆの相すがた、一念多いちねんた念ねんの争あらそいなり。まことに金鑰きんく知しりがたく邪正じやしやういかでか弁わ弁まべきなれば、聞きく者多ものおほく源みなもとを忘わすれて流ながれに順したがい、新あたしきを貴とうとみて古ふるきを知らず。『尚書しやうしよ』にいえる事ことあり「人は旧ふるきを貴とうとみ、器うつわは新あたしきを貴とうとむ」。予われこの文もんに驚おどろきて、いささか上人しやうじんの旧ふるき迹あとを尋たずねて、やや近代きんだいの新あたしき徑みちを捨すてんと欲おもう。よてあるいはかの書しよ

状を集め、あるいは書籍に載するところのことばを拾う。やまとことばはその文見易く、その心解り易し。願わくは諸の往生を求めん人、これをもて灯として浄土の路を照らせとなり。もし落つるところの書あらば後賢必ずこれに続け。時に文永十二年正月廿五日上人遷化の日、報恩のこころざしをもていう事しかなり。

和語第二之一のいち 当巻に三篇あり。

三部経 釈 第一

御誓言 書 第一

往生 大要抄 第二

三部経 釈 第一

黒谷作

浄土三部経

『双卷経』

四十八願

『双卷経』『観経』『阿弥陀経』、これを浄土三部経という。

『双卷経』にはまず阿弥陀仏の四十八願を説く。後に願成就を明かせり。その四十八願というは、法蔵比丘、世自在王仏の御前にして菩提心を発して、浄

仏国土、成就衆生の願を立てたまう。およそその四十八願に、あるいは無三惡趣とも立て、あるいは不更惡趣とも説き、あるいは悉皆金色ともいふは、みな第十八の願のためなり。「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信樂して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ」といえるは、四十八願の中にこの願殊に勝れたりとす。その故は、かの国にもし生まるる衆生なくば、悉皆金色、無有好醜等の願も何によてか成就せん。往生する衆生のあるにつきてこそ身の色も金色に好醜ある事もなく、五通をも具し宿命をも解るべけれ。これによて善導釈してのたまわく「法藏比丘四十八願を立てたまいて、願願にみな、もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、我が名号を称して我が国に生ぜんと願じて、下十念に至らんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ」。四十八願に一一にみなこの心ありと釈したまえり。

およそ諸仏の願というは上求菩提、下化衆生の心なり。『大乘經』にいわく「菩薩の願に二種有り。一つには上求菩提、二つには下化衆生の心なり。その上求菩提の本意は易く衆生を濟度せんがためなり」。しかればただ本意は下化衆生の願にあり。今弥陀如来の国土を成就したまうも衆生を引接せんがためなり。総じていづれの仏も成仏已後は、内証外用の功德、濟度利生の誓願、いづれも

いずれもみな深くして勝劣ある事なけれども、菩薩の道を行じたまいし時の善巧方便の誓、みなこれ区区なる事なり。

弥陀如来は因位の時、専ら我が名号を念ぜん者を迎えんと誓いたまいて、兆載永劫の修行を衆生に廻向したまう。濁世の我らが依怙、末代の衆生の出離、これにあらざれば何をか期せんや。これよてかの仏も「我れ超世の願を建つ」と名告りたまえり。三世の諸仏もいまだかくのごとくの願をば発したまわす。十方の薩埵もいまだこれらの願はまします。この願もし剋果せば、大千まさに感動すべし。虚空の諸の天人、まさに珍妙の華を雨らすべし」と誓いたまいしかば、大地六種に震動し、天より花雨りて「汝まさに正覚を成りたまうべし」と告げたりき。法蔵比丘いまだ成仏したまわずともこの願疑うべからず。いかにいわんや成仏已後、十劫に成りたまえり。信ぜずばあるべからず。「かの仏今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず。衆生称念すれば必ず往生を得」と釈したまえるはこれなり。「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜して、乃至一念、至心に廻向して、かの国に生ぜん」と願すれば、すなわち往生を得て、不退転に住す。ただ五逆と正法を誹謗するのを除く」文。これは第十八の願成就の文なり。願には「乃至十念」と説

くといえども、正しく願成就の中には一念にありと明かせり。つきに三輩往生の文あり。これは第十九の臨終現前の願成就の文なり。発菩提心等の業をもて三輩を分かつといえども、往生の業は通じてみな「一向専念無量寿仏」といへり。これすなわちかの仏の本願なるが故なり。

「その仏の本願の力、名を聞きて往生せんと欲すれば、みなことごとくかの國に到りて、おのずから不退転に致る」といふ文あり。漢朝に玄通律師という者ありき。小戒を持てる者なり。遠行して野寺に宿したりけるに、隣房に人ありてこの文を誦す。玄通これを聞きて一両遍誦して後思い出す事もなくて忘れにけり。その後この玄通律師戒を破れり。その罪にて閻魔の庁に到る時、閻魔法王のたまわく「汝、仏法流布のところに生まれたりき。所学の法あらば速やかに説くべし」とて高座に上せたまいき。その時玄通、高座に上りて想い回らすに、すべて心に覚ゆる事なし。野寺に宿して聞きし文あり。これを誦せんと思ひ出でて「其仏本願力」といふ文を誦したりしかば、閻魔法王、玉の冠を傾けて「これはこれ西方極樂の弥陀如来の功德を説く文なり」といいて礼拝したまいき。願力不思議なる事この文に見えたり。

「仏、弥勒に語げたまわく。それ、かの仏の名号を聞くことを得ることありて、



無上功德

信心歡喜して、乃至一念せんに、まさに知るべし、この人、大利を得たりとす。すなわちこれ無上の功德を具足す」文。弥勒菩薩（に）この『經』を付属したまうには「乃至一念するをもて大利無上の功德」とのたまえり。『經』の大意、これらの文に明らかなるものなり。

「觀經」

つぎに『觀經』には定善、散善を説きて、念仏をもて阿難に付属したまう。

「汝、好くこの語を持せよ」といえるはこれなり。

光明徧照の文

第九の「眞身觀」に「光明、徧く十方世界を照らして、念仏の衆生を撰取して

光明無量の願

捨てたまわず」という文あり。濟度衆生の願は平等にして差別ある事なけれども、無縁の衆生は利益を蒙る事能わず。この故に弥陀善逝、平等の慈悲に催されて、十方世界に徧く光明を照らして一切衆生にことごとく縁を結ばしめんがために、光明無量の願を立てたまえり。第十二の願これなり。名号をもて因として衆生を引接したまう事を一切衆生に徧く聞かしめんがために、第十七の願

諸仏称揚の願

に「十方世界の無量の諸仏ことごとく咨嗟して我が名を称せずといわば正覚を取らじ」という願を立てたまいて、つぎに十八の願に「乃至十念せんに、もし

念仏往生の願

生ぜずんば正覚を取らじ」と立てたまえり。

これによて釈迦如来この土にして説きたまうがごとく、十方にも各恒河沙の

仏ましまして同じくこれを示したまえるなり。しかれば光明の縁は遍く十方世界

を照らして漏らす事なく、また十方無量の諸仏、みな名号を称讃したまえば聞

こえずというところなし。「我れ仏道を成ずるに至らば、名声十方に超えん。

究竟して聞こゆるところなくんば、誓いて正覚を成ぜじ」と誓いたまいしはこ

の故なり。しかれば光明の縁と名号の因と和合せば撰取不捨の益を蒙らん事疑

うべからず。この故に『往生礼讃』の序にいわく「諸仏の所証は平等にしてこ

れ一なれども、もし願行をもて来し収むるに因縁なきにあらず。しかるに弥陀世

尊、本発の深重誓願、光明名号をもちて十方を撰化したまえり」といえり。

またこの願久しく衆生を濟度せんがために寿命無量の願を立てたまえり。第十

三の願これなり。総じては光明無量の願は横に一切衆生を広く撰取せんがため

なり。寿命無量の願は豎に十方世界を久しく利益せんがためなり。かくのごと

くの因縁和合すれば、撰取の光明の中にまた化仏菩薩ましましてこの人を撰護

して百重千重圍繞したまうに、信心いよいよ増長し衆苦ごとごとく消滅す。

「臨終の時、仏みずから來迎したまうに、諸の邪業繫よく礙うるものなし」。

これは衆生命終る時に臨みて、百苦來たり逼めて身心安き事なく、悪縁外に

牽き妄念内に催して、境界、自体、当生の三種の愛心競い起る。第六天の魔王

光明名号撰化十  
方

寿命無量の願

來迎引接の願

この時に当りて威勢を起してもて妨をなす。かくのごとき種種の障を除かんとがために、必ず臨終の時にはみずから菩薩聖衆に圍繞せられてその人の前に現ぜんと誓いたまえり。第十九の願これなり。これによて臨終の時至れば仏来迎したまう。行者これを見たてまつりて、心に歡喜をなして禪定に入るがごとくして、たちまちに觀音の蓮台に乗じて安養の宝池に到るなり。これらの益あるが故に「念仏衆生 攝取不捨」といふなり。

またこの『經』に「三心を具する者は、必ずかの国に生ず」と説けり。三心といは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向發願心なり。三心は区々に分かれたりといえども、要を取り詮を簡んでこれをいえば深心に撰めたり。

善導和尚 釈したまわく「至といは真なり、誠といは実なり。一切衆生の身口意業に修するところの解行、必ず真実心の中に作すべきことを明かさんとす。外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」といへり。その解行といは、罪惡生死の凡夫、弥陀の本願によて、十声一声決定して生まると真実に解りて行ずる、これなり。外には本願を信ずる相を現じ内には疑心を懐く、これは不真実の心なり。

「深心は深く信ずる心なり。決定して深く自身は現にこれ罪惡生死の凡夫なり、

曠劫よりこのかた常に流転して出離の縁なしと信じ、決定して深くこの阿弥陀如来は四十八願をもて衆生を撰取したまうこと疑いなく慮なければ、かの願力に乗じて定めて往生することを得と信ずべし」といえり。

始めにまず「罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた出離の縁あることなしと信ぜよ」といえるは、これすなわち断善闡提のごとくなる者なり。かかる衆生の一念念すれば、無始よりこのかたいまだ出でざる生死の輪廻を出でてかの極楽世界の不退の国土に生まるといふによりて、信心は発るべきなり。およそ仏の別願の不思議は凡心の測るところにあらず、仏と仏とのみよく知りたまえり。阿弥陀仏の名号を称するに由て五逆十惡のごとく生まるといふ別願の不思議の力まします、誰かこれを疑うべき。善導の『疏』にいわく「あるいは人ありて汝衆生、曠劫よりこのかたおよび今生の身口意業に一切の凡聖の身の上において具に十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等の罪を造りて、いまだ除き尽くすこと能わず、しかもこれらの罪は三界惡道に繫属す。いかにぞ一生の修福、念仏をもてすなわちかの無漏無生の国に入りて永く不退の位を証悟することを得んや、といわば、いふべし、諸仏の教行は數、塵沙に越えたり。稟識の機縁、隨情一つにあらず。譬えば世間の人の眼に見つべく信じつべきがごときは、明能く暗を

破し、空能く有を含む、地能く載養し、水能く生潤し、火能く成壞するがごとし。かくのごとき等の事、ことごとく待対の法と名づく。すなわちみずから見るべし、千差万別なり。いかにいわんや仏法不思議の力、あに種種の益なからんや」といへり。極樂世界に水鳥樹林の微妙の法を轉るは不思議なれども、これらは仏の願力なればと信じて、なんぞただ第十八の「乃至十念」という願をのみ疑うべきや。総じて仏説を信ぜばこれも仏説なり。華嚴の三無差別、般若の尽淨虚融、法華の実相真如、涅槃の悉有仏性、誰か信ぜざらんや。これも仏説なり、かれも仏説なり。いづれをか信じ、いづれをか信ぜざらんや。

それ三字の名号は少なしといえども、如来所有の内証外用の功德、万億恒沙の甚深の法門をこの中に撰めたり。誰かこれを測るべきや。『疏』の「玄義分」に、この名号を釈していわく「阿弥陀仏といはこれ天竺の正音、ここには翻じて無量寿覚という。無量寿といはこれ法、覚といはこれ人、人法並べて彰わす。かるが故に阿弥陀仏という。人法といは所觀の境なり。これについて依報あり、正報あり」といへり。しかれば始め弥陀如来、觀音、勢至、普賢、文殊、地藏、竜樹より乃至かの土の菩薩声聞等に至るまで具えたまえるところの事理の觀行定慧の功力、内証の智慧、外用の功德、総じて万徳無漏の所証の法門、みなこ

とごとく三字の中に撰まれり。総じて極楽界にいずれの法門か漏れたるところあらん。しかるをこの三字の名号をば諸宗各我が宗に釈し入れたり。真言には阿字本不生の義、四十二字を出生せり。一切の法は阿字を離れたる事なきが故に功德甚深の名号といえり。天台宗には空仮中の三諦、正了縁の三義、法報応の三身、如来所有の功德、これを出でざるが故に功德莫大なりといえり。かくのごとく諸宗に各我が存ずるところの法について阿弥陀の三字を釈せり。いまこの宗の心は、真言の阿字本不生の義も、天台の三諦一理の法も、三論の八不中道の旨も、法相の五重唯識の心も、総じて森羅の万法、広くこれを撰すと習う。極楽世界に漏れたる法門なきが故に。

ただし今弥陀の願の心はかくのごとく解るにはあらず。ただ深く信心を至して称うる者を迎えんとなり。耆婆、扁鵲が万病を癒やす薬は、諸の草、万の薬をもて合葉せりといえども、病者これを解りて、その薬種何分、その薬草何両和合せりと知らず。しかれどもこれを服するに万病ごとごとく癒ゆるがごとし。ただし怒らしくはこの薬を信ぜずして、我が病は極めて重し、いかがこの薬にては癒ゆる事あらんと疑いて服せずんば、耆婆が医術も扁鵲が秘方も空しくしてその益あるべからざるがごとく、弥陀の名号もかくのごとし。それ煩煩悪業の病、極め

て重し、いかがこの名号を称えて生まるる事あらんと疑いてこれを信せずば、  
弥陀の誓願、釈尊の所説空しくして、その験あるべからず。ただ仰いで信すべ  
し、良葉を得て服せずして死する事なかれ。崑崙の山に行きて珠を採らずして  
帰り、旃檀の林に入りて枝を攀じずして出でなば後悔いかせん。みずからよく  
思量すべし。

そもそも我ら曠劫よりこのかた仏の出世にも値いけん、菩薩の化道にも値い  
けん。過去の諸仏も現在の如来もみなこれ宿世の父母なり、多生の朋友なり。  
かれはいかにして菩提を証したまえるぞ、我は何に由り生死には住まるぞ。恥  
ずべし恥ずべし、悲しむべし悲しむべし。本師釈迦如来の、大罪の山に入りて邪  
見の林に隠れて三業放逸に六情全からざらん衆生を、我が国土には取り置きて  
教化度脱せしめんと誓いたまいたりしは、そもそもいかにしてかかる衆生をば  
度脱せしめんと誓いたまうぞ、と尋ぬれば、阿弥陀如来因位の時、無上念王と  
申して菩提心を発し生死を過度せしめんと誓いたまいしに、釈迦如来は宝海梵  
志と申して、無上念王、国の位を捨てて菩提心を発し撰取衆生の願を發したまい  
し時に、この宝海梵志も願を發して「我れ必ず穢土にして正覚を成りて悪業の  
衆生を引導せん」と誓いたまいてこの願を發したまうなり。曠劫よりこのかた諸

仏出世して縁に随い機を計りて各衆生を化度したまう事、数、塵沙に過ぎたり。あるいは大乘を説き小乗を説き、あるいは実教を弘め権教を弘む。有縁の機はみなことごとくその益を得。

ここに釈尊、八相成道を五濁悪世に唱えて、放逸邪見の衆生の出離その期なきを哀れみて「これより西に極楽世界あり、仏まします、阿弥陀と名づけたてまつる。この仏は乃至十念せんにもし生ぜずんば正覚を取らじと誓いたまいて仏に成りたまえり。速やかに念ぜよ、出離生死の道多しといえども悪業煩悩の衆生の疾く生死を離るる事この門に過ぎたるはなし」と教えて「ゆめゆめ疑う事なかれ、六方恒沙の諸仏も証誠したまうなり」と愍ろに教えたまいて「我れもし久しく穢土にあらば邪見放逸の衆生、我を譏り我を背きて、却りて悪道に墮ちなん。濁世に出でたる事は本意ただこの事を衆生に聞かしめんがためなり」とて、阿難尊者に「汝、よくこの事を遐代に流通せよ」と愍ろに約束し置きて、拔提河の辺、沙羅林の下にして、八十の春の天、二月十五の夜半に頭北面西にして滅度に入りたまいき。その時に日光を失ひ、草木色を變じ、龍神八部禽獸鳥類に至るまで天に仰ぎて泣き地に伏して叫ぶ。阿難目連等の諸の大弟子等、悲泣の涙を抑えて相い議していわく「釈尊の恩に酬れたてまつりて八十の



春秋を送りき。化縁ここに尽きて黄金の膚たちまちに隔たりたまぬ。あるいは我ら世尊に問いたてまつるに答えたまえる事もありき。あるいは釈尊みずから告げたまう事もありき。濟度利生の方便今は誰に向かいてか問いたてまつるべき。すべからく如来の御ことばを記し置きて未来にも伝え、御形見ともせん」といいて多羅葉を拾いてことごとくこれを記し置きしを、三蔵たちこれを訳して唐土へ渡し本朝へ伝えたまう。諸宗に掌るところの一代聖教これなり。

しかるに阿弥陀如来、善導和尚と名告りて唐土に出でて「如来、五濁に出現して隨機方便して群萌を化す。あるいは多聞にして得度すと説き、あるいは小解をもて三明を証すと説き、あるいは福慧双に障を除くと教え、あるいは禪念し坐して思量せよと教ゆ。種種の法門はみな解脱すれども念仏して西方に往くに過ぎたるはなし。上一形を尽くし十念に至り三念五念まで、仏、来迎したまう。直に弥陀の弘誓重きがために、凡夫をして念ずればすなわち生ぜしむることを致す」とのたまえり。釈尊出世本懐ただこの事にありというべし。「自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中に転たさらに難し。大悲伝えて普く化せば、真に仏の恩を報ずることを成す」といえば、釈尊の恩を報ずるはこれ誰がためぞや、偏に我らがためにあらずや。この度空しくて過ぎなば出離いずれの時をか期せん

とする。速やかに信心を發して生死を過度すべし。

つぎに廻向發願心といは、人毎に具しつべき事なり。国土の快樂を聞きて誰か願わざらんや。そもそもかの国土に九品の差別あり。我らいづれの品を期すべき。善導和尚の御心は「極樂弥陀は報佛報土なり。未斷惑の凡夫すべて生まるべからずといえども、弥陀の別願不思議にて、罪惡生死の凡夫、一念十念して生まる」と釈したまへり。しかるを上古よりこのかた多く「下品」といふとも足ぬべし」といいて上品を願わず。これは惡業の重きを恐れて心上品に係けざるなり。もしそれ惡業によらば総じて往生すべからず、願力にて生まればなんぞ上品に進まん事を難しとせん。総じては弥陀、淨土を設けたまう事は、願力の成就する故なり。しかればまた念仏衆生の生まるべき国なり。「乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ」と立てたまいて、この願にて感得したまうところなるが故なり。今また『觀經』の九品の業をいわば、下品は、五逆十惡の罪人、臨終の時始めて善知識の勧めによて、あるいは十声あるいは一声、称念して生まるる事を得たり。我ら罪業重しといえども五逆をば造らず、行業疎かなりといえども一声十声に過ぎたり。臨終より前に弥陀の誓願を聞き得て随分に信心を致す。しかれば下品まで下るべからず。中品は小乗の持戒の行者、

孝養仁義礼智信等の行人なり。この品にはなかなか生まれ難し。小乗の行人にもあらず、持ちたる戒もなければ、我らが分にあらず。上品は大乗の凡夫、菩提心等の行なり。菩提心は諸宗各心得たりという。浄土宗の心は、浄土に生まれんと願うを菩提心という。念仏これ大乘の行なり、無上功德なり。しかれば上品往生は手を引くべからず。また本願に「乃至十念」と立てたまいて、臨終現前の願に大衆と圍繞せられてその人の前に現せんと立てたまえり。中品は声聞衆の来迎、下品は化仏の三尊あるいは金蓮花等の来迎なり。しかるを大衆と圍繞して現せんと立てたまえる本願の意趣は、上品の来迎を設けたまえり。なんぞ強ちに相拒わんや。また善導和尚「三万已上は上品上生の業」とのたまえり。数遍によて上品に生まるべし。また三心について九品あるべし。信心によて上品に生まるべしと見えたり。上品を願う事は我が身のためにはあらず、かの国に生まれ已りて還りて疾く衆生を化せんがためなり。これあに仏の御意に契わざらんや。

つぎに『阿弥陀經』はまず極楽の依正の功德を説く。これ衆生の願樂の心を勧めんがためなり。後に往生の行を明かすに「少善根をもては生まるることを得べからず、阿弥陀仏の名号を執持して一日七日すれば往生することを得」と明

かせり。衆生これを信ぜざらん事を恐れて、六方に各恒河沙の諸仏在して大千の舌相を舒べて証誠したまえり。善導釈していわく「この証によて生まることを得ずは、六方如来の舒べたまえる舌、一たび口より出で已りて永く口に還り入らずして、自然に壞爛せん」とのたまえり。しかればこれを疑わん者は弥陀の本願を疑うのみにあらず、釈尊の所説を疑うなり。釈尊の所説を疑うは六方恒沙の諸仏の所説を疑うなり。すなわちこれ大千に舒べたまえる舌相を壞爛するなり。もしまたこれを信ぜばただ弥陀の本願を信ずるのみにあらず、釈尊の所説を信ずるなり。釈尊の所説を信ずるは六方恒沙の諸仏の所説を信ずるなり。一切の諸仏を信ずるは一切の法を信ずるになる。一切の法を信ずるは一切の菩薩を信ずるになる。この信弘くして広大の信心なり。善導和尚のいわく「凡夫疑見の執を断ぜんがために、みな舌相を舒べて三千に覆い、ともに七日名号を称すること証し、また釈迦の言説の真なることを表す」「六方の如来、舌を舒て証す、専ら名号を称すれば西方に至ると。彼に到れば華開て妙法を聞き、十地の願行自然に彰わる」「心に念仏して疑いを生ずることなかれ。六方の如来不虛を証す。三業専心に雜乱なれば、百宝の蓮華時に応じて現る」文。

御誓言の書 第二

「一枚起請文」

唐 我が朝にも諸の智者たちの沙汰し申さるる観念の念にもあらず。また学問をして念の心を解りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑なく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の子細そうらわす。ただし三心四修など申す事のそうろうは、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふ内にもりそうろうなり。この外に奥深き事を存ぜば、二尊の御愍に外れ本願に漏れそうろうべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の御法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じくして、智者の振る舞いをせずして、ただ一向に念仏すべし。

道光の註

これは御自筆の書なり。勢観聖人に授けられき。

往生大要抄 第二

沙門源空

聖浄二門

今我が浄土宗には二門を立てて釈迦一代の説教を撰むるなり。いわゆる聖道門、浄土門なり。

聖道門

始め華嚴阿含より、終り法華涅槃に至るまで、大小乗の一切の諸経に説くと

ころの、この娑婆世界にありながら断迷開悟の道を聖道門とは申すなり。これにつきて大乘の聖道あり、小乗の聖道あり。大乘にも二つあり、すなわち仏乗と菩薩となり。小乗に二つあり、すなわち声聞と縁覚との二乗なり。これをすべて四乗と名づく。

仏乗とは即身成仏の教なり。真言、達磨、天台、華嚴等の四乗に明かすところなり。すなわち真言宗には「父母所生身速証大覚位」と申して、この身ながら大日如来の位に登ると習うなり。仏心宗には「前仏後仏以心伝心」と習いて、たちまちに人の心を指して仏と申すなり。かるが故に即身は仏の法と名づけて成仏とは申さぬなり。この法は釈尊入滅の時『涅槃経』を説き已りて後、ただ一偈をもちて迦葉尊者に付属したまえる法なり。天台宗には「煩惱即菩提生死即涅槃」と観じて、観心にて仏に成ると習うなり。八歳の竜女が南方無垢世界にしてたちまちに正覚を成りし、その証なり。華嚴宗には「初発心時便成正覚」とて、また即身成仏と習うなり。これらの宗にはみな即身頓証の旨を述べて仏乗と名づくるなり。

つぎに菩薩乘といは歴劫修行成仏の教なり。三論、法相の二宗に習うところなり。すなわち三論宗には八不中道の無相の観に住して、しかも心には四弘誓

願がんを發おこし身みには六波羅蜜ろつぱらみつを行ぎじて三僧祇さんそうぎに菩薩ぼさつの行ぎを修しゆして後のち仏ほとけに成なると申もうすなり。法相宗ほつそうしゅうには五重ごじゅう唯識ゆいしきの觀かんに住じゅうして、しかも四弘しじやうを發おこし六度ろくどを行ぎじて三祇劫さんぎきやうを経て仏ほとけに成なると申もうすなり。これらを菩薩乘ぼさつじやうと名なづく。

つぎに縁覚乘えんかくじやうといは飛花落葉ひからくようを見て一人諸法ひとりしよぼうの無常むじやうを悟さとり、あるいは十二因縁じゅうにいんを觀かんじて、疾ときは四生ししう遅おそきは百劫ひやくきやうに悟さとり開ひらくなり。

つぎに声聞乘しやうもんじやうといは始め不淨ふじやう、數息すそくを觀かんするより、終おわり四諦しだいの觀かんに至いたるまで、疾ときは三生さんしやう遅おそきは六十劫ろくじつじやうに四向三果しやうさんかの位くらゐを経て大羅漢だいらかんの極位ごくゐに至いたるなり。この二乘にじやうの道どうは成實じやうじつ、俱舍くしやの兩宗りやうしゅうに習ならうところなり。また声聞しやうもんにつきて戒行かいぎやうを具そなうべし。比丘びくは二百五十戒にひやくごじつがいを受じゆ持じし、比丘尼びくには五百戒ごひやくがいを受じゆ持じするなり。五篇ごひん七聚しちじゆの戒かいと名なづくるなり。また沙弥しゃみ、沙弥尼しゃみにの戒かい、式叉摩尼しきしまにの六法ろくぽう、優婆塞うぱさく、優婆夷うぱいの五戒ごかい、みなこれ律宗りつじゅうの中に明あかすところなり。

およそ大小だいにしやうじやう乘じやうを簡えらばず、この四乘しじやうの聖道しやうじどうは我われらが身みに堪たえ、時ときに適かないたる事ことにてはなきなり。もし声聞しやうもんの道みちに趣おもむくは二百五十戒にひやくごじつがい持もち難がたし。苦集滅道くじゆめつどうの觀かん成じやうじ難がたし。もし縁覚えんかくの觀かんを求もとむとも飛花落葉ひからくようの悟さとり、十二因縁じゅうにいんの觀かんともに心こころも及およばぬ事ことなり。三聚十重さんじゆじゅうじやうの戒行かいぎやう發得はつとくし難がたし。四弘六度しじやうろくどの願行がんぎやう成就じゆじやうし難がたし。身子しんじは六十劫ろくじつじやうまで修行しゆぎやうして乞眼こつげんの惡緣あくえんに値あいて、たちまちに菩薩ぼさつの廣大こうだいの心こころを翻ひるがえし

き。いわんや末法のこのごろをや、下根の我らをや。たとい即身頓証の理を觀ずとも、真言の入我我入阿字本不生の觀、天台の三觀六即中道実相の觀、華嚴宗の法界唯心の觀、仏心宗の即心是仏の觀、理は深く解は浅し。かるが故に末代の行者その証を得るに極めて難し。この故に道綽禪師は「聖道の一種は今時は証し難し」とのたまえり。すなわち『大集の月藏經』を引きて各行すべきありようを明かせり。細かに述ぶるに及ばず。

つぎに浄土門は、まずこの娑婆世界を厭い捨てて急ぎてかの極樂浄土に生まれてかの国にして仏道を行ずるなり。しかればかつがつ浄土に至るまでの願行を立てて往生を遂ぐべきなり。しかるにかの国に生まるる事は、すべて行者の善惡を簡ばず、ただ仏の誓を信じ信ぜざるによる。五逆十惡を造れる者もただ一念十念に往生するはすなわちこの理なり。この故に道綽は「ただ浄土の門のみありて通入すべき路なり」と釈したまえり。通じて入るべしというにつき、私に心得るに二つの心あるべし。一つには広く通じ、二つには遠く通ず。広く通ずといは、五逆の罪人を挙げてなお往生の機に撰む、いわんや余の輕罪をや、いかにいわんや善人をやと心得つれば、往生の器に嫌わるる者なし。かるが故に広く通ずというなり。遠く通ずといは、末法万年の後法滅百歳まで



この教留まりて、その時に聞きて一念する、みな往生すといえり。いわんや末法の中をや、いかにいわんや正法像法をやと心得つれば、往生の時、漏るる世なし。かるが故に遠く通ずというなり。しかればこのごろ生死を離れんと欲わん者は、難証の聖道を捨てて易往の浄土を欣うべきなり。

またこの聖道浄土をば難行道易行道と名づけたり。譬を取りてこれをいうには、難行道とは険しき道を徒歩より行かんがごとし、易行道とは海路を船より行くがごとし、といえり。しかるに目しい足なえたらん者は陸地には向かうべからず、ただ船に乗りてのみ向いの岸には着くべきなり。しかるにこのごろ我らは智慧の眼しいて行法の足折れたる輩なり。聖道難行の険しき道にはすべて望を絶つべし。ただ弥陀の願の船に乗りてのみ生死の海を渡りて極楽の岸には着くべきなり。今この船といはすなわち弥陀の本願に譬うるなり。この本願といは四十八願なり。その中に第十八の願をもて衆生の往生の行の定めたる本願とせり。二門の大旨、略してかくのごとし。

聖道の一門を聞きて浄土の一門に入らんと欲わん人は、道綽善導の釈をもて所依の『三部経』を習うべきなり。前には聖道浄土の一門を分別して浄土門に入るべき旨を申し開きつ。今は浄土の一門につきて修行すべきようを申す

べし。

浄土に往生せんと欲わば心と行との相應すべきなり。かるが故に善導の釈に  
 いわく「ただしその行のみあるは行すなわち孤りにしてまた至るところなし。た  
 だその願のみあるは願すなわち虚しくしてまた至るところなし。要す願と行とをあ  
 いとも扶けて、ためにみな起すところなり」。およそ往生のみに限らず、聖  
 道門の得道を求めんにも心と行とを具すべしといえり。発心修行と名づくるこれ  
 なり。今この浄土宗に善導のごとくは安心起行と名づけたり。

まずその安心といは、『観無量寿經』に説いていわく「もし衆生ありてかの国  
 に生まれんと願わん者は、三種の心を発してすなわち往生すべし。何をか三つと  
 する、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。三心を具す  
 る者は必ずかの国に生まる」といえり。

善導和尚の『観經疏』ならびに『往生礼讚』の序にこの三心を釈したまえ  
 り。一つに至誠心といは、まず『往生礼讚』の文を出さば「一つには至誠心、  
 いわゆる身業にかの仏を礼拝せんにも、口業にかの仏を讚嘆稱揚せんにも、意  
 業にかの仏を専念觀察せんにも、およそ三業を起すには必ず真実を須いよ。かる  
 が故に至誠心と名づく」といえり。つぎに『観經疏』の文を出さば「一つに

至誠心しじょうしんといは、至しといは真しんなり、誠じょうといは実じつなり。一切衆生の身口意業の所修いっさいしゆじょうしんくういぎょうのしよしゆの解行げぎやう、必ず真実心しんじつしんの中なかになすべきことを明かさんと欲おもう。外ほかには賢善精進けんぜんしやうじんの相さうを現げんじて、内うちには虚仮こけを懐いだくことなかれ、「善の三業ぜんさんごうを起おこすことは必ず真実心しんじつしんの中なかに作なすべし。内外明闇ないげみやうあんを簡えらばずみな真実しんじつを須もちいよ」といえり。この二つの釈しゃくを引ひいて私わたくしに料簡りやうけんするに、至誠心しじょうしんといは真実しんじつの心しんなり。その真実しんじつといは内外相応ないそうおうの心しんなり。身に振ふる舞まい口くちにいい意こころに思おもはん事こと、みな人目ひとめを飾かぎる事ことなくまことを現あらわすなり。しかるを人常ひとつねにこの至誠心しじょうしんを熾盛しじやうしん心こころと心得こころえて、勇猛強盛ゆうまうきやうせいの心しんを発おこすを至誠心しじょうしんと申もうすは、この『釈しゃく』の意こころには違たがうなり。文字もんじも換かわり意こころも換かわりたるものを。さればとてその猛利みやうりの心しんはすべて至誠心しじょうしんを背そむくと申もうすにはあらず。それは至誠心しじょうしんの上うへの熾盛しじやうしん心こころにてこそあれ、真実しんじつの至誠心しじょうしんを地じにして熾盛しじやうなるは勝すぐれ、熾盛しじやうならぬは劣おとるにてあるなり。

これにつきて九品の差別しやべつまでも心得こころうべきなり。されば善導ぜんどうの『観經疏かんぎやうのしよ』に九品の文もんを釈しゃくする下したに一一いちいちの品毎ほんごとに「三心さんしんを弁定べんじやうして以もちて正しやういん因いんとす」と定さだめてこの三心さんしんは九品くほんに通つうずべしと釈しゃくしたまえり。恵心えしんもこれを引ひきて「禪師ぜんじの釈しゃくのごときは理り、九品くほんに通つうずべし」とこそは記しされたれ。この三心さんしんの中なかの至誠心しじょうしんなれば至誠心しじょうしんすなわち九品くほんに通つうずべきなり。また至誠心しじょうしんは深心じんしんと廻向えこう発願心はつがんしんとを

体とす。この二つを離れては何によりてか至誠心を現すべき。広く外を尋ぬべきにあらざり、深心も廻向発願心もまことなるを至誠心とは名づくるなり。三心すでに九品に通ずべしと心得ての上には、その差別のあるようを心得るに三心の浅深強弱によるべきなり。かるが故に上品上生には『経』に「精進勇猛なるが故に」と説き、『釈』には「日数少なしといえども作業猛しきが故に」といへり。また上品中生をば「行業や弱くして」と釈し、上品下生をば「行業強からず」など釈せられたれば、三心につきて強きも弱きもあるべしとこそ心得られたれ。弱き三心具足したらん人は位こそ下がらんずれ、なお往生は疑うべからざるなり。それは強盛の心を発さずは至誠心少けて永く往生すべからずと心得て、みだりに身をも下し剩え人をも軽しむる人人の不便に覚ゆるなり。さらなり、強盛の心の発らんはめでたき事なり。善導の十徳の中に始めの至誠念仏の徳を出すにも「一心に念仏して力の竭るにあらざれば休まず、乃至寒冷にもまた汗を流す。この相状をもて至誠を表す」などあるなれば、誰誰もさこそは励むべけれ。ただしこの定なるをのみ至誠心と心得て、これに違わんをば至誠心少けたりといわんには、善導のごとく至誠心至極して勇猛ならん人ばかりぞ往生は遂ぐべき、我らがごときの冠弱の心にてはいかがが往生すべきと臆せられ

ぬべきなり。かれは別して善導一人の徳を営むるにてこそあれ、これは通じて一切衆生の往生を決するにてあれば、たくらぶべくもなき事なり。所詮はただ我がごときの凡夫、各分につけて強弱眞実の心を発すを至誠心と名づけたるとこそ善導の『釈』の心は見えたれ。

文につけて細かに心得れば「外には賢善精進の相を現じ、内には虚仮を懐くことなかれ」というは、内には愚かにして外には賢き相を現じ、内には悪をのみ造りて外には善人の相を現じ、内には懈怠にして外には精進の相を現ざるを虚仮とは申すなり。外相の善悪をば顧みず、世間の謗誉をば弁えず、内心に穢土をも厭い淨土をも欣い、悪をも止め善をも修して、まめやかに仏の意に契わん事を欲うを眞実とは申すなり。眞実は虚仮に對することはなり。眞と仮と對し、虚と実と對する故なり。

この眞実虚仮につきて委しく分別するに四句の差別あるべし。一つには外を飾りて内には虚しき人、二つには外をも飾らず内も虚しき人、三つには外は虚しく見えて内はまことある人、四つには外にもまことを現し内にもまことある人。かくのごときの四人の中には前の二人をばともに虚仮の行者というべし、後の二人をばともに眞実の行者というべし。しかればただ外相の賢愚善悪をば簡ばせず、

内心の邪正 迷悟によるべきなり。

およそこの眞実の心は、人殊に具し難く事に触れて少く易き心ばえなり。愚かにはかなしと誡められたるようもある理なり。無始よりこのかた今身に至るまで思い習わして、さしも久しく心を離れぬ名利の煩惱なれば、断たんとするに易らかに離れ難きなりけり、と思ひ許さる方もあれども、また許しはんべるべき事ならねば、我が心を顧みて誡め治すべき事なり。しかるに我が心の程も思い知られ人の上をも見るに、この人目飾る心ばえはいかにもいかにも思い離れぬこそかえすがえす心憂く悲しく覚ゆれ。この世ばかりを深く執する人は、ただ眼の前の誉められ虚しき名をも揚げんと欲わんをば、いうに足らぬ事にて措きつ。浮世を背きてまことの道に趣きたる人人の中にも、却りてはかなく由なき事かなと覚ゆる事もあるなり。昔この世を執する心の深かりし名残にて、ほどほどにつけたる名利を振り捨てたるばかりを有り難くいみじき事に思いて、やがてそれをこの世ざまにも心の色のうるせきに取り成して、解浅き世間の人の心の底をば知らず、上に現るる相事柄ばかりを貴がりいみじがるをのみ本意に思いて、深き山路を尋ね幽かなる住处を占むるまでも一筋に心の静まらんためとしも思わで、おのずから尋ね来たらん人、もしは伝え聞かん人の思わん事をのみ先立てて、

籬の内、庭の木立、庵室のしつらい、道場の莊嚴など貴くめでたく心細くも  
 のあわれならん事柄をのみ引き替えんと執する程に、罪の事も仏のおぼしめさん事  
 をば顧みず、人の譏にならぬようをのみ思い當む事より外には思い雜うる事もな  
 くて、まことしく往生を願うべき方をば思いも入れぬ事などのあるが、やがて  
 至誠心少けて往生せぬ心ばえにてあるなり。また世を背きたる人こそなかなか  
 聖名聞もありてきようにもあれ、世にありながら往生を願わん人はこの心は何  
 故にかあるべきと申す人のあるは、なお細やかに心得ざるなり。世の誉を思い  
 人目を飾る心は何事にも亘る事なれば、夢幻の榮華重職を欲うのみに限らぬ  
 事にてあるなり。なかなか在家の男女の身にて後世を思いたるをば心ある事とい  
 みじく有り難きところそは人も申す事なれば、それにつけて外を飾りて人にいみじ  
 がられんと思ふ人のあらんも難かるべくもなし。まして世を捨てたる人などに  
 向かいては、さなからん心をも、あわれを知り外にあいしらわんために、後世の  
 恐ろしさこの世の厭わしきなんどは申すべきぞかし。

またかように申せば、偏にこの世の人目はいかにもありなんとて人の譏をも顧  
 みず、外を飾らねばとて心のままに振る舞うが善きと申すにてはなきなり。菩薩  
 の譏嫌戒とて人の譏になりぬべき事をばなせそ、とこそ誠められたれ。これは法

に任せて振る舞えば放逸として悪き事にてあるなり。それに時に臨みたる譏嫌戒の

ためばかりにいささか人目を慎む方はわざともさこそあるべき事を、人目をのみ執してまことの方をも顧みず、往生の障になるまでに引き成さるる事の、かえすがえすも口惜しきなり。譏嫌戒と名づけてやがて虚仮になる事もありぬべし。眞実といひなしてあまり放逸なる事もありぬべし。これを構えて構えてよくよく心得説くべし。ことばなお足らぬ心地するなり。

またこの眞実につきて自利の眞実、利他の眞実あり。また三界六道の自他の依正を厭い捨てて軽しめ賤しめんにも、阿弥陀仏の依正二報を禮拜讚嘆憶念せんにも、およそ厭離穢土欣求淨土の三業に亘りてみな眞実なるべき旨、『疏』の文に具さなり。その文繁くしてことごとく出すに能わず。至誠心のありさま略してかくのごとし。

二つに深心といは、まず『礼讚』の文にいわく「二者深心、すなわち眞実の信心なり。自身はこれ煩煩を具足せる凡夫なり、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知して、いま弥陀の本弘誓願の名号を称すること下十声一声に至るまで定めて往生することを得と信知して乃至一念も疑う心あることなかれ。かるが故に深心と名づく」といへり。つぎに『觀經疏』の文にいわく「二つに



深信じんしんといは、すなわちこれ深信じんしんの心なり。また二種にしゆあり。一つには決定けつじようして深く  
 自身じしんは現げんにこれ罪惡ざいあく生死しじゆの凡夫ぼんぷなり、曠劫こうこくよりこのかた常没流じやうぼつりゆう転てんして出離しゆりの  
 縁えんあることなしと信しんぜよ。二つには決定けつじようして深くかの阿彌陀あみだ仏ぶつの、四十八願しじゅうはちがんを  
 もて衆生しゆじやうを撰受せんじゆしたまうこと、疑うたがなく慮おもんばかりなくかの願力がんりきに乗じやうじて定さだめて往おち  
 生じやうすることを得うと信しんじ、また決定けつじようして深く釈迦しやか仏ぶつ、この『觀經』かんぎやうの三福九品さんぷくくほんじやう定  
 散さん二善にぜんを説ときてかの仏ぼつの依正二報えしやうにほうを証讚じやうさんして人ひとをして欣慕ぎんぼせしめたまうことを  
 信しんじ、また決定けつじようして深く『彌陀經』みだきやうの中なかに十方恒沙じつぱうじやうじやの諸佛しよぶつの、一切いっさいの凡夫決定ぼんぷけつじよう  
 て生むまるることを得うと証しやう勸かんしたまえり。願ねがわくは一切いっさいの行者ぎやうじや、一心いっしんにただ仏語ぶつご  
 を信しんじて身命しんみやうを顧かえりみず、決定けつじようして依より行ぎやうじて、仏ぼつの捨すてしめたまわんことをばす  
 なわち捨すて、仏ぼつの行ぎやうぜしめたまわんことをばすなわち行ぎやうじ、仏ぼつの去さらしめたまわ  
 ん処ところをばすなわち去され。これを仏教ぶつぎやうに隨順ずいじゆんし、仏意ぶつちに隨順ずいじゆんすと名なづく。これを眞しんの  
 仏弟子ぶつでしと名なづく。「また深信じんしんを深信じんしんといは、決定けつじようして自心じしんを建立こんりきやうして教きやうに順じゆんじて  
 修行しゆぎやうして永ながく疑錯ぎしやくを除のぞきて、一切いっさいの別解別行べつげべつぎやう、異学異見異執いぎくいけんいしやくのために退失たいしつし傾動きやうどう  
 せられざれ」といえり。

私わたくしにこの二つの釈しやくを見るに、文もんに広略こうりやくあり、ことばに同異どういありといえども、  
 まず二種にしゆの信心しんじんを立つる事ことはその趣おもむきこれ一つなり。すなわち二つの信心しんじんといは、

始めに「我が身は煩悩罪惡の凡夫なり、火宅を出でず、出離の縁なしと信ぜよ」といい、つぎには「決定往生すべき身なりと信じて一念も疑うべからず、人にもいい妨げらるべからず」なんどいえる、前後のことは相違して心得難きに似たれども、心を止めてこれを案ずるに、始めに我が身の程を信じ、後には仏の願を信ずるなり。ただし後の信心を決定せしめんがために始めの信心をば挙ぐるなり。その故は、もし始めの我が身を信ずるようを挙げずしてただちに後の仏の誓ばかりを信ずべき旨を出したらましかば、諸の往生を願わん人、雜行を修して本願を憑まざらんをばしばらく措く、正しく弥陀の本願の念仏を修しながらも、なお心にもし貪欲瞋恚の煩悩をも起し、身におのずから十惡破戒等の罪業をも犯す事あらば、みだりに自身を怯弱して却りて本願を疑惑しなまし。まことにこの弥陀の本願に十声一声に至るまで往生すという事はおぼろけの人にてはあらず、妄念をも起さず罪をも造らぬ人の、甚深の解を起し強盛の心をもちて申したる念仏にてぞあるらん、我らごときの似非ものどもの一念十声にてはよもあらずとこそ覚えんも憎からぬ事なり。これは善導和尚は未來の衆生のこの疑を起さん事を顧みて、この二種の信心を挙げて、我らがごとき煩悩をも断ぜず罪惡をも造れる凡夫なりとも、深く弥陀の本願を信じて念仏すれば十声一声に至るまで

決定して往生する旨をば積したまえるなり。かくだに積したまわざらましかば我  
 らが往生は不定にぞ覚えまし。危うく覚ゆるにつけてもこの積の殊に心に染みて  
 覚えはんべるなり。さればこの義を心得分かぬ人にこそあるめれ、仏の本願を  
 疑わねども我が心の悪ければ往生は叶わじと申し合いたるが、やがて本願を疑  
 うにてはんべるなり。さように申し立ちなば、いか程までか仏の本願に契わず、  
 さほどの心こそ本願には契いたれとは知りはんべるべき。それを弁えざらんと  
 りては煩煩を断ぜざらん程は心の悪さは尽きせぬ事にてこそあらんずれば、いま  
 は往生してんと思ひ立つ世はあるまじ。また煩煩を断じてぞ往生はすべきと申す  
 になりなば凡夫の往生という事はみな破れなんず。すでに弥陀の本願力というと  
 も煩煩罪惡の凡夫をばいかでか助けたまうべき、え迎えたまわじものをなんど申  
 すになるぞかし。仏の御力をばいか程と知るぞ。それに過ぎて仏の願を疑う事は  
 いかがあるべき。また仏に立ち会いまいらする過ありなんと申すべき事にてこそ  
 あれ。すべて我が心の善惡を計らいて仏の願に契い契わざるを心得あわせん事  
 は、仏智ならでは叶うまじき事なり。

されば善導は『観經 疏』の一の卷に弘願を釈するに「一切善惡の凡夫生まる  
 ることを得ることは、阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせずということな

し」といい置きて、「仏の密意弘深にして教門曉り難し。三賢十聖も測りて闕うところにあらず。いわんや我信外の軽毛なり、あえて旨趣を知らんや」とこそは釈したまいたれば、善導だにも十信にだにも至らぬ身にて、いかでか仏の御心を知るべきとこそは仰せられたれば、まして我らが解にて仏の本願測らひ知る事はゆめゆめ思いよるまじき事なり。ただ心の善悪をも顧みず、罪の軽重をも弁えず、心に往生せんと欲いて口に南無阿弥仏と称えば、声について決定往生の想をなすべし。その決定によりてすなわち往生の業は定まるなり。かく心得れば易きなり。往生は不定に思えばやがて不定なり、一定と思えばやがて一定する事なり。所詮は深信といは、かの仏の本願はいかなる罪人をも捨てず、ただ名号を称うる事一声までに決定して往生す、と深く憑みて少しの疑もなきを申すなり。

『観經』の下品下生を見るに「十悪五逆の罪人も一念十念に往生す」と説かれたり。「十悪五逆等と貪瞋と四重と偷僧と正法を謗ずると、いまだかつて慚愧して前愆を悔せず」といえるは在生の時の悪業を明かす。「たちまち往生の善知識の急に勧めて専らかの仏の名を称せしむるに遇う。化仏菩薩声を尋ねて到る。一念心を傾くれば宝蓮に入る」といえるは臨終の時の行相を明かすなり。

また『双卷經』の奥に「三宝滅尽の後の衆生乃至一念に往生す」と説かれたり。善導釈していわく「万年に三宝滅すれども、この経住すること百年ならん。その時に聞きて一念せんも、みなまさに彼に生ずることを得べし」といへり。この二つの心をもて弥陀の本願の広く摂し遠く及ぶ程をば知るべきなり。

重きを挙げて軽きを摂め、悪人を挙げて善人を摂め、遠きを挙げて近きを摂め、後を挙げて先を摂むるなるべし。まことに大悲誓願の深広なる事たやすくことばをもて述ぶべからず。心を止めて思ふべきなり。そもそもこのごろ末法に入れりといえどもいまだ百年に満たず、我ら罪業重しといえどもいまだ五逆を造らず。しかればはるかに百年法滅の後を済いたまへり、いわんやこのごろをや。広く五逆極重の罪を捨てたまわず、いわんや我らをや。ただ三心を具して専ら名号を称すべし。たとい一念といふともみだりに本願を疑う事なかれ。

ただしかよりの理を申しつれば、罪をも捨てたまわねば心に任せて罪を造らんと苦しかるまじ、また一念にも一定往生すなれば念仏は多く申さずともありなんと、悪く心得る人の出来て、罪をば許し念仏をば制するように申しなすが、かえすがえすもあさましくそうろうなり。悪を勧め善を止むる仏法はいかがあるべき。されば善導は「貪瞋煩惱を来し問えざれ」と誡め、また「念念相續して命

の畢らんを期とせよ」と教え、また「日所作は五万六万乃至十万」なんどこそ勧めたまいたれ。ただこれは大悲本願の一切を撰する、なお十悪五逆をも漏らさず、称名念仏の余行に勝れたる、すでに一念十念に現れたる旨を信ぜよと申すにてこそあれ。かようの事は悪く心得れば何方も儼事になるなり。強く信ずる方を勧めれば邪見を起し、邪見を起させじと拵うれば信心強からずなるが術なき事にてはんべるなり。かようの分別はこのついでに事長ければ、起行の下に細かに申し開くべし。

また引くところの『疏』の文を見るに、後の信心について二つの心あり。すなわち仏について深く信じ、経について深く信すべき旨を釈したまえるにやと心得らるるなり。まず仏について信ずといは、一つには弥陀の本願を信じ、二つには釈迦の所説を信じ、三つには十方恒沙の護勸を信すべきなり。経について信ずといは、一つには『無量寿経』を信じ、二つには『観経』を信じ、三つには『阿弥陀経』を信するなり。すなわち始めに「決定して深く阿弥陀仏の四十八願」といえる文は弥陀を信じ、また『無量寿経』を信するなり。つぎに「また決定して深く釈迦仏の『観経』」といえる文は釈迦を信じ、『観経』を信するなり。つぎに「決定して深く『弥陀経』の中」といえる文は十方諸仏を信じ、また

『阿弥陀経』を信ずるなり。

またつぎの文に「仏の捨てしめたまわんをば捨てよ」というは雑修雜行なり。

「仏の行せしめたまわんことをば行ぜよ」というは専修正行なり。「仏の去らし

めたまわんことをば去れ」というは異学異解雜縁乱動の処なり。善導の「自らも

障え他の往生の正行をも障う」と釈したまえる事、まことに恐るべきものなり。

「仏教に随順す」といは釈迦の御教えに随い、「仏願に随順す」といは弥陀の願に随

うなり。「仏意に随順す」といは二尊の御意に契うなり。いまの文の意は、さき

の文に『三部経』を信ずべしといえるに違わず。詮じてはただ雑修を捨てて専修

を行ずるが仏の御意に契うところを聞こえたれ。

またつぎの文に「別解別行のために破られざれ」というは、解異に行異なら

ん人の難じ破らんについて、念仏をも捨て往生をも疑う事なかれと申すなり。解

異なる人と申すは天台法相等の諸宗の学生これなり。行異なる人と申すは真言

止觀等の一切の行者これなり。これらはみな聖道門の解行なり。浄土門の解

行に異なるが故に別解別行とは名づけたり。かくのごときの人にいい破らるまじ

き理はこの文のつぎに細かに釈したまえり。すなわち「人に就きて信を立つ」

「行に就きて信を立つ」という二つの信を挙げたり。始めの「人に就きて信を立

随順仏教、随順  
仏願、随順仏意

別解別行

就人立信

つ」といえる、これなり。その文広博にして具さに出すに能わず。その義、至要にしてさらに捨て難きによりて、言葉を略し心を取りてその趣を明かさば、文の意「解行不同的人ありて経論の証拠を引きて一切の凡夫往生することを得ずといわばすなわち報えていえ、仁者が引くところの経論を信ぜざるにはあらず、みなことごとく仰いで信ずといえども、さらに汝が破をば受けず。その故は汝が引くところの経論と我が信ずるところの経論とすでに各別の法門なり。仏この『観経』『弥陀経』等を説きたまうこと、時も別に処も別に對機も別に利益も別なり。仏の説教は機に随い時に随いて不同なり。かれには通じて人天菩薩の解行を説く、これは別して往生淨土の解行を説く。すなわち仏の滅後の五濁極増の一切の凡夫決定して往生することを得と説きたまえり。我いま一心にこの仏教によりて決定して奉行す。たとい汝百千万億生まれずとも、ただ我が往生の信心を増長し成就せんと報えよ」といへり。「また行者さらに難破の人に向かいて説きていえ。仁者よく聴け、我いま汝がためにさらに決定の信の相を説かんといいて、始めは地前菩薩羅漢辟支仏等より、終り化仏報仏まで立て挙げて、たとい化仏報仏十方に充ち満ちて各光を輝かし舌を出して十方に覆いて、一切の凡夫念仏して一定往生すという事は僻事なり信ずべからずとのたま



わんに、我これらの諸仏の所説を聞くとともに一念も疑退の心を起してかの国に生まるることを得ざらんことを畏れじ。何をもての故にとならば、一仏は一切仏なり、大悲等同にして少しきの差別なし。同体の大悲の故に一仏の所説はすなわちこれ一切仏の化なり。ここをもてまず弥陀如来「我が名号を称すること下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覚を取らじ」と願じてその願成就してすでに仏に成りたまえり。また釈迦如来はこの五濁悪世にして悪衆生、悪見、悪煩悩、悪邪無信盛りなる時、弥陀の名号を称め衆生を勧励して、称念すれば必ず往生することを得、と説きたまえり。また十方の諸仏は衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらん事を畏れて、すなわちともに同心同時に各舌相を出して遍く三千世界に覆いて誠実のことは説きたまう、汝等衆生みな釈迦の所説、所讚、所証を信ずべし、一切の凡夫罪福の多少、時節の久近を問わず、ただよく上は百年を尽くし下は一日七日十声一声に至るまで、心を一つにして専ら弥陀の名号を念ずれば定めて往生する事を得という事を信ずべし、必ず疑うことなかれ、と証誠したまえり。かるが故に人について信を立つ」といえり。かくのごときは一切諸仏の一仏も残らず、同心にあるいは願を發し、あるいはその願を説き、あるいはその説を証して、一切の凡夫念仏して決定往生すべき旨を勧めたまえる上には、い

かなる仏ほとけのまた来きたりて往生おうじょうすべからずとはのたまうべきぞといふ理ことわりをもて、  
 仏ほとけ来きたたりてのたまうとも驚おどろくべからずとは信しんずるなり。仏ほとけなおしかり、いわん  
 や地じ前ぜん地上じじょうの菩薩ぼさつをや、いわんや小しょう乘じょうの羅漢らかんをやと心得こころえつれば、まして凡夫ぼんぶの  
 とかく申もうさんによりて一念いちねんも疑うたがい驚おどろく心こころあるべからずとは申もうすなり。  
 大方おほおかたこの信心しんじんのようを人ひとの心こころ得とつかぬと覚おぼゆるなり。心こころのそみそみと身みの毛け  
 も豎いよだち涙なみだも落おつるをのみ信しんの起おこると申もうすは僻事ひがごとにてあるなり。それは歡喜かんぎ、隨喜ずいき、  
 悲喜ひきとぞ申もうすべき。信しんといは疑うたがい對たいする心しんにて、疑うたがいを除のぞくを信しんとは申もうすべきな  
 り。見みる事ことにつけても聞きく事ことにつけても、その事こと一定いちじょうさぞと思おもい取りつる事は、  
 人ひといかに申もうせども不定ふじょうに思おもい成なる事ことはなきぞかし。これをこそものを信しんずるとは  
 申もうせ。その信しんの上うえに歡喜かんぎ隨喜ずいきなんども起おこらんは勝すやれたるにてこそあるべけれ。た  
 とえば年としごろ心こころの程ほどをも見み取りて、空事そらごとせぬ確たしかならん人ひとぞと頼たのみたらん人の、  
 さまざまに恐おそろしき誓言せいげんを立て、等閑なぞりならず慙ねんごろに契ちぎり置おきたる事ことのあらんを、  
 深ふかく頼たのみて忘れず持たもちて、心こころの底そこに深ふかく貯たくわえたらんに、いと心こころの程ほども知らざらん  
 人ひとの「それな頼たのみそ、空事そらごとをするぞ」と、さまざまにいい妨さまたげんにつきて少すこし  
 も変かわる心こころはあるまじきぞかし。それかように弥陀みだの本願ほんがんをも深ふかく信しんじていい破やぶ  
 るべからず、いわんや一代いちだいいの教主きょうしゅも付属ふぞくしたまえるをや、いわんや十方じつぱうの諸しよ仏ぶつ

も証しょうじょう誠じょうしたまえるをやと心こころ得とべきにや。まことに理ことわりを聞き開ひらかざらん程ほどこそあらめ、一ひとたびもこれを聞ききて信しんを發おこしてん後のちはいかなる人ひととかくいうともなじにかは乱みだるる心こころあるべきとこそは覺おぼえそうらえ。

次に「行ぎょうに就きついて信しんを立たつ」というは「すなわち行ぎょうに二ふたつあり。一ひとつには正しょう行ぎょう、二ふたつには雜ざう行ぎょうなり」といえり。この二行にぎょうについて、あるいは行ぎょう相そう、あるいは得失とくしつ、文もん広ひろく義ぎ多おほしといえどもしばらく略りやくを存ぞんす。具つぶさには下しもの起行きぎょうの中なかに明あかすべし。深心じんしんの太要たいようを取とるにこれにあり。

この文もんに下卷げかんあるべしと見みゆるが、いづくに隠かくれてはんべるにかいまだ尋たずね得えず。もし尋たずね得える人ひとあらばこれに続つげ。

黒谷上くろだにしょうじょう人語灯録にんごとうろく卷くわん第十一だいじゅういち

黒谷上人語灯録卷 第十二

欣浄沙門了惠集録

和語第二之二十一 当卷に五篇あり

念仏往生 要義抄 第四

三心義 第五

七箇条 起請文 第六

念仏大意 第七

浄土宗 略抄 第八

念仏往生 要義抄 第四

源空作

念仏往生

それ念仏往生は十悪五逆を簡はず、迎摂するに十声一声をもてす。聖道諸宗の成仏は上根上智を本とする故に声聞菩薩を機とす。しかるに世すでに末法になり人みな悪人なり。はやく修し難き教を学せんよりは、行じ易き弥陀の名号を称えてこの度生死の家を出すべきなり。ただしずれの経論も釈尊の説き置きたまえる経教なり。しかれば『法華』『涅槃』等の大乘経を修行して仏

に成るに何の難き事かあらん。それにとりていまま少し『法華経』は三世の諸仏もこの『経』によりて仏に成り、十方の如来もこの『経』によりて正覚を成りたまう。しかるに『法華経』なんどを読みたまつらん何の不足かあらん。かように申す日はまことにさるべき事なれども、我らが器量はこの教に及ばざるなり。その故は『法華』には菩薩聞を機とする故に我ら凡夫は叶うべからずと思ふべきなり。しかるに阿弥陀仏の本願は末代の我らのために発したまえる願なれば利益今の時に決定往生すべきなり。我が身は女人なればと思ふ事なく、我が身は煩惱悪業の身なればという事なけれ。もとより阿弥陀仏は罪悪深重の衆生の三世の諸仏も十方の如来も捨てさせたまいたる我らを迎えんと誓いたまいける願に遇いたてまつれり。往生疑なしと深く思い入れて南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申せば、善人も悪人も、男子も女人も、十人は十人ながら、百人は百人ながら、みな往生を遂ぐるなり。

自力他力の念仏

他力

問いていわく、称名念仏申す人はみな往生すべしや。

答えていわく、他力の念仏は往生すべし。自力の念仏は全く往生すべからず。

問いていわく、その他力の様、いかん。

答えていわく、ただ一筋に我が身の善悪を顧みず決定往生せんと欲いて申す

を他力たうりきの念仏ねんぶつという。喩たとえば麒麟きりんの尾おにつきたる蠅はえの一ひと跳はねに千里せんりを駆かけり、輪王りんおうの御幸みゆきに遇あいぬる卑夫ひふの一日いちにちに四天下しんてんげを巡めぐるがごとし。これを他力たうりきと申もうすなり。また大きな石いしを船ふねに入れつれば時の程ほどに向むかいの岸きしに届とずくがごとし。全くこれは石いしの力ちからにはあらず、船ふねの力ちからなり。それかように我われらが力ちからにてはなし、阿弥陀仏あみだぼつの御力おんちからなり。これすなわち他力たうりきなり。

問といていわく、自力じりきというはいかん。

答こたえていわく、煩惱ぼんのう具足ぐそくして悪わるき身みをもて煩惱ぼんのうを断だんじ悟さとり現あらわして成じようぶつ仏ぶつすと心得こころえて昼ちゆうや夜やに励はげめども、無始むしより貪瞋とんじんぐ具足ぐそくの身みなるが故ゆえに永ながく煩惱ぼんのうを断だんずる事こと難たきなり。かく断だんじ難がたき無明むみやう煩惱ぼんのうを三毒さんどくぐ具足ぐそくの心こころにて断だんせんとする事こと、喩たとえば須弥しゆみを針はりにて碎くだき大海だいかいを芥子けしの杓ひさくにて汲くみ尽つくさんがごとし。たとい針はりにて須弥しゆみを碎くだき芥子けしの杓ひさくにて大海だいかいを汲くみ尽つくすとも、我われらが悪業あくごう煩惱ぼんのうの心こころにては曠劫かうくつ多生たしやうを経ふとも仏ほとけに成あらん事こと難たし。その故ゆえは念念ねんねん歩歩ぶぶに思おもひと思おもう事ことは三途さんず八難はちなんの業ごう、寐ねても寤さめても案あんじと案あんする事ことは六趣ろくしゆししやう四生ししやうの絆きずななり。かかる身みにてはいかでか修しゆ道どうをして成じようぶつ仏ぶつはすべきや。これを自力じりきとは申もうすなり。

問といていわく、聖人しやうにんの申もうす念仏ねんぶつと、在家ざいけの者ものの申もうす念仏ねんぶつと、勝劣しやうりついかん。

答こたえていわく、聖人しやうにんの念仏ねんぶつと世間者せけんしやの念仏ねんぶつと、功德くどく等としくして全く替かわり目めあ

るべからず。

疑うたがいていわく、この条じょうなお不審ふしんなり。その故ゆえは女人にょにんにも近づちかかず不浄ふじょうの食じきもせずして申もうさん念仏ねんぶつは貴たかるべし、朝夕あきゆうに女境にょきょうにむつれ酒さけを飲のみ不浄ふじょう食じきをして申もうさん念仏ねんぶつは定さだめて劣おとるべし。功德くどくいかでか等ひとしかるべきや。

答こたえていわく、功德くどく等とくしくして勝しょう劣れつあるべからず。その故ゆえは阿弥陀仏あみだぶつの本願ほんがんの故ゆえを知らざる者もののかかるおかしき疑うたがをばするなり。しかる故ゆえは昔むかし阿弥陀仏あみだぶつにひやくいちじゅうおくの諸仏しよぶつの淨土じよとどの莊嚴じやうげん宝衆ほうしゆ等の誓願せいがん利益りやくに至いたるまで世自在せじざい王おう仏ぶつの御み前まえにしてこれを見みたまうに、我われらごときの妄想もうそう顛倒てんたうの凡夫ぼんぶの生むまるべき事ことのなきなり。されば善導ぜんどう和尚しやうしやう釈しゃくしていわく「一切いっさいの仏土ぶつどみな嚴淨げんじやうなれども、凡夫ぼんぶの乱らん想そう恐おそらくは生しじ難がたし」といへり。この文もんの意いは「一切いっさいの仏土ぶつどは妙たえなれども乱想らんそうの凡夫ぼんぶは生むまるる事ことなし」と釈しゃくしたまうなり。各おのおのの御身おんみを計はからいて御覽ごらんすべきなり。その故ゆえは口くちに経きやうを読み身みには仏ほとけを礼拝らいはいすれども心こころには思おもわじ事ことのみ思おもわれて一時ひとときも止とどまる事ことなし。しかれば我われらが身みをもていかでか生しやうじ死じを離はなるべき。かかりける時ときに曠劫くわうくわうよりこのかた三途さんず八難はちなんを住すまかとして炯燃きやうねん猛火まうかに身みを焦こがして出いずる期ごなかりけるなり。悲かなしきかなや、善心ぜんしんは年とし年に随したがいて薄うすくなり、悪心あくしんは日に随したがいていよいよ増ます。されば古人こじんのいえる事ことあり「煩惱ぼんのうは身みに添そえる影かげ、去さ

らんとすれども去らず。菩提は水に浮かべる月、取らんとすれども取られず」と。  
この故に阿弥陀仏五劫に思惟して建てたまひし深重の本願と申すは、善悪を隔  
てず、持戒破戒を嫌わず、在家出家をも簡はず、有智無智をも論せず、平等の  
大悲を發して仏に成りたまいたれば、ただ他力の心に住して念仏申さば一念須臾  
の間に阿弥陀仏の来迎に預かるべきなり。生まれてよりこのかた女人を目に見ず  
酒肉五辛永く断じて五戒十戒等堅く持ちてやんごとなき聖人も、自力の心に住  
して念仏申さんにおきては仏の来迎に預からん事、千人が一人、万人が二人な  
んどやそうらわんずらん。それも善導和尚は「千中無一」と仰せられてそちら  
えばいがあるべくそうらうらんと覚えそうらう。およそ阿弥陀仏の本願と申す  
事は様もなく、我が心を澄ませとにもあらず、不淨の身を淨めよとにもあらず、  
ただ寐ても寤めても一筋に御名を称うる人をば臨終には必ず来たりて迎えたまう  
なるものを、という心に住して申せば、一期の終りには仏の来迎に預らん事疑  
あるべからず。我が身は女人なれば、また在家の者なれば、という事なく、往  
生は一定と思召すべきなり。

澄心の念仏と妄  
心の念仏

問いていわく、心の澄む時の念仏と妄心の中の念仏とその勝劣いかん。  
答えていわく、その功德等しくしてあえて差別なし。



疑うたがいていわく、この条じょうなお不ふ審しんなり。その故ゆえは心こころの澄すむ時ときの念ねん仏ぶつは余よ念ねんもなく一向いつこう極ごく樂らく世界せかいの事ことのみ思おもわれ弥みだ陀だの本ほん願がんのみ案あんぜらるるが故ゆえに雜まじうるものなれば清しょう淨じょうの念ねん仏ぶつなり。心こころの散さん乱らんする時ときは三さん業ごう不ふ調じょうにして口くちには名みょう号ごうを称となえ手てには念ねん珠じゆを回まわすばかりにてはこれ不ふ淨じょうの念ねん仏ぶつなり。いかでか等ひとしかるべき。

答こたえていわく、この疑うたがをなすはいまだ本ほん願がんの故ゆえを知らざるなり。阿あ弥みだ陀だ仏ぶつは悪あく業ごうの衆しゆ生じょうを濟すくわんために生しょう死じの大海だいかいに弘くわい誓ぜいの船ふねを浮うかべたまえるなり。たとえは船ふねに重おもき石いしかろ軽あさき麻あさ殻からを一つ船ふねに入れて向むかいの岸きしに届とずくがごとし。本ほん願がんの殊しゆ勝しょうなる事ことはいかなる衆しゆ生じょうもただ名みょう号ごうを称となうる外ほかは別べつの事ことなきなり。

問といていわく、一声いっしょうの念ねん仏ぶつと十じゅう声しょうの念ねん仏ぶつと功く徳とくの勝しょう劣れついかん。

答こたえていわく、ただ同おなじ事ことなり。

疑うたがいていわく、この事ことまた不ふ審しんなり。その故ゆえは一いっ声しょう十じゅう声しょうすでに数かずの多た少しょうあり。

いかでか等ひとしかるべきや。

答こたう、この疑うたがは一いっ声しょう十じゅう声しょうと申もうす事ことは最さい期ぎの時ときの事ことなり。死しする時とき一いっ声しょう申もうす物ものも往おう生じょうす、十じゅう声しょう申もうす者ものも往おう生じょうすという事ことなり。往おう生じょうだにも等ひとしくば功く徳とく徳とくなんぞ劣れつならん。本ほん願がんの文もんに「もし我われ仏ほとけをえたらんに、十じゅう方ほうの衆しゆ生じょう、至し心しんに、信しん樂らくして、我わが国くにに生しょうぜんと欲ほつして、乃な至い十じゅう念ねんせんに、もし生しょうぜずんば正しょう覺がくを取と

らじ」。この文の意は法蔵比丘「我れ仏に成りたらん時、十方の衆生、極楽に生まれんと欲いて、南無阿弥陀仏ともしは十声もしは一声申さん衆生を迎えずは仏に成らじ」と誓いたまう。かるが故に数の多少を論ぜず、往生の得分は同じきなり。本願の文顕然なり。なんぞ疑わんや。

最期の念仏と平生の念仏

問いていわく、最期の念仏と平生の念仏といずれか勝れたるや。

答えていわく、ただ同じ事なり。その故は平生の念仏臨終の念仏とて何の替り目かあらん。平生の念仏の死ぬれば臨終の念仏となり、臨終の念仏の延ぶれば平生の念仏となるなり。

難じていわく、最期の一念は百年の業に勝れたりと見えたり、いかん。

答えていわく、この疑はこの文を知らざる難なり。息の止まる時の一念は悪業強くして善業に勝れたり、善業強くして悪業に勝れたりという事なり。ただしこの申す人は念仏者にてはなし。もとより悪人の沙汰をいう事なり。平生より念仏申して往生を願う人の事をばともかくもさらに沙汰に及ばぬ事なり。

撰取の益

問いていわく、撰取の益を蒙る事は平生か臨終か、いかん。

答えていわく、平生の時なり。その故は往生の心まことにて我が身を疑う事なくて来迎を待つ人はこれ三心具足の念仏申す人なり。この三心具足しぬれば必ず

智者の念仏と愚者の念仏

極楽に生まるといふ事は『観經』の説なり。かかるころざしある人を阿弥陀仏は八万四千の光明を放ちて照らしたまふなり。平生の時照らし始めて最期まで捨てたまわぬなり。かるが故に不捨の誓約と申すなり。

問いていわく、智者の念仏と愚者の念仏といずれも差別なしや。

答えていわく、仏の本願に届かば少しの差別もなし。その故は阿弥陀仏に成りたまわざりし昔「十方の衆生、我が名を称せば乃至十声までも迎えん」と誓いを建てたまひけるは智者を簡び愚者を捨てんとにはあらず。されば『五会法事讚』にいわく「多聞と淨戒を持つとを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、ただ心を廻して多く念仏せしむれば、能く瓦礫を棄じて金と成さしむ」。この文の意は、智者も愚者も、持戒も破戒も、ただ念仏申さばみな往生すといふ事なり。この心に住して我が身の善悪を顧みず仏の本願を憑みて念仏申すべきなり。この度輪廻の絆を離るる事念仏に過ぎたる事はあるべからず。この書き置きたるものを見て誹り謗ぜん輩は必ず九品の台に縁を結び、互いに順逆の縁虚しからずして一仏淨土の侶たらん。

そもそも機をいえば五逆重罪を簡はず女人闍提をも捨てず、行をいえば一念十念をもてす。これにて五障三従を恨むべからず。この願を憑み、この行を

機と行

励むべきなり。念仏の力にあはずは善人なお生まれ難し、いわんや悪人をや。五念に五障を消し三念に三徒を滅して一念に臨終の来迎を蒙らんと、行住坐臥に名号を称うべし。時処諸縁にこの願を憑むべし。あなかしこ、あなかしこ。

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

### 三心義 第五

『観無量寿経』には「もし衆生ありてかの国に生ぜんと願せば、三種の心を発すべし。すなわち往生す。何等をか三つとす、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。三心を具する者は必ずかの国に生ず」といえり。『礼讃』には三心を積し已りて「三心を具すれば、必ず往生することを得。もし一心をも少けぬれば、すなわち生ずることを得ず」といえり。しかれば三心を具すべきなり。

一つに至誠心というは真実の心なり。身に礼拝を行じ、口に名号を称え、心に相好を想う、みな真実を須いよ。すべてこれをいうに、穢土を厭い浄土を欣いて諸の行業を修せん者みな真実をもて勤むべし。これを勤修せんに、外には賢善精進の相を現じ内には愚悪懈怠の心を懷きて修するところの行業は、日夜

十二時に間なくこれを行ずとも往生を得ず。外には愚悪懈怠の相を現して内には賢善精進の思いに住してこれを修行する者、一時一念なりともその行虚しからず必ず往生を得。これを至誠心と名づく。

二つに深心というのは深く信ずる心なり。これについて二つあり。一つには我はこれ罪悪不善の身、無始よりこのかた六道に輪廻して往生の縁なしと信じ、二つには罪人なりといえども、仏の願力をもて強縁として必ず往生を得んこと疑なく慮なしと信ず。

これについてまた二つあり。一つには人に就きて信を立つ、二つには行に就きて信を立つ。人に就きて信を立つというは、出離生死の道多しといえども大きに分ちて二つあり。

一つには聖道門、二つには淨土門なり。聖道門というのはこの娑婆世界にて煩惱を断じ菩提を証する道なり。淨土門というのはこの娑婆世界を厭いかの極樂を欣いて善根を修する門なり。二門ありといえども聖道門を聞きて淨土門に帰す。しかるにもし人ありて多く経論をひきて「罪悪の凡夫、往生することを得じ」といわん。このことを聞きて退心をなさずいよいよ信心を増すべし。故に凡夫となれば罪障の凡夫の淨土に往生すという事はこれ釈尊の誠言なり。凡

夫の妄執にあらざ。我すでに仏の言を信じて深く浄土を欣求す。たとい諸仏菩薩來りて「罪障の凡夫、浄土に生まるべからず」とのたまうともこれを信ずべからず。故いかんとなれば菩薩は仏の弟子なり、もしまことにこれ菩薩ならば仏説を背くべからず。しかるにすでに仏説に違いて往生を得ずとのたまう、まことの菩薩にあらず。また仏はこれ同体の大悲なり、まことに仏ならば釈迦の説に違うべからず。しかればすなわち『阿弥陀經』に「二日七日、弥陀の名号を念じて必ず生まるることを得」と説けり。これを六方恒沙の諸仏、釈迦仏に同くこれを証誠したまへり。しかるにいま釈迦の説を背きて往生せずという。かるが故に知りぬ、まことの仏にあらず、これ天魔の變化なり。この義をもての故に仏菩薩の説なりとも信ずべからず。いかにいわんや余説をや。汝が執するところの大小異なりといえどもみな仏果を期する穢土の修行、聖道門の心なり。我らが修するところは正雑不同なれどもともに極樂を欣う往生の行業は浄土門の心なり。聖道門はこれ汝が有縁の行、浄土門というは我が有縁の行、これをもてかれを難すべからず、かれをもてこれを難すべからず。かくのごとく信するものをば就人立信と名づく。

次に行に就きて信を立つというは、往生極樂の行、区区なりといえども二種を

ば出でず。一つには正行、二つには雑行なり。

正行というは阿弥陀仏におきて親しき行なり。雑行というは阿弥陀仏におき

て疎き行なり。まず正行というはこれにつきて五つあり。一つにはいわく読誦、

いわゆる三部経を読むなり。二つには觀察、いわゆる極楽の依正を觀するなり。

三つには禮拜、いわゆる阿弥陀仏を禮拜するなり。四つには称名、いわゆる弥

陀の名号を稱するなり。五つには讚歎供養、いわゆる阿弥陀仏を讚歎し供養す

るなり。この五つをもて合せて二つとす。一つには、一心に専ら弥陀の名号

を念じて行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる、これを正定業と

名づく、かの仏の願に順ずるが故に。二つには前の五つが中の称名の外の禮拜

読誦等をみな助業と名づく。

次に雑行というは前の五種の正助二業を除きて已外の諸の読誦大乘發菩提

心持戒勸進等の一切の行なり。

この正助二行につきて五種の得失あり。一つには親疎對、いわゆる正行は阿

弥陀仏に親しく雑行は疎く、二つには近遠對、いわゆる正行は阿弥陀仏に近く

雑行は阿弥陀仏に遠し、三つには有間無間對、いわゆる正行は念を係くるに無

間なり、雑行は念を係くるに間斷あり、四つには廻向不廻向對、いわゆる正行

は廻向を用いざれどもおのずから往生の業となる、雑行は廻向せざる時は往生の業とならず。五つには純雑対、いわゆる正行は純極樂の業なり、雑行はしからず、十方の淨土乃至人天の業なり。かくのごとき信ずるを就行立信と名づく。三つに廻向発願心というは過去及び今生の身口意業に修するところの一切の善根を眞実の心をもて極樂に廻向して往生を欣求するなり。これを廻向発願心と名づく。この三心を具しぬれば必ず往生するなり。

七箇条の起請文 第六

およそ往生淨土の人の要法は多しといえども淨土宗の大事は三心の法門にあるなり。もし三心を具せざる者は日夜十二時に頭の火を払うがごとくにすれども遂に往生を得ずといえり。極樂を欣わん人はいかにもして三心の様を心得て念仏すべきなり。三心というは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。

至誠心  
 まず至誠心というは、大師釈してのたまわく「至というは眞なり、誠というは実なり」といえり。ただ眞実心を至誠心と善導は仰せられたるなり。眞実というは諸の虚仮の心のなきをいうなり。虚仮というは貪瞋等の煩惱を起して正



念を失うを虚仮心と積するなり。すべて諸の煩惱の起る事はみなもと貪瞋を母として出生するなり。貪というについて喜足小欲の貪あり、不喜足大欲の貪あり。今淨土宗に制するところは不喜足大欲の貪煩惱なり。まず行者かよの道理を心得て念仏すべきなり。これが真実の念仏にてあるなり。喜足小欲の貪は苦しからず。瞋煩惱も敬上慈下の心を破らずして道理を心得解くなり。痴煩惱というは愚かなる心なり。この心を賢くなすべきなり。まず生死を厭い淨土を欣いて往生を大事と嘗みて諸の家業を絆とせざれば痴煩惱なきなり。少少の痴は往生の障にはならず。これ程心得れば貪瞋等の虚仮の心は失せて真実心は易く起るなり。これを淨土の菩提心というなり。詮するところ生死の報を軽しめ念仏の一行を励むが故に真実心とはいうなり。

二つに深心というは深く念仏を信する心なり。深く念仏を信ずというは余行なく一向に念仏になるなり。もし余行を兼ねれば深心少けたる行者というなり。詮するところ釈迦の淨土三部経は偏に念仏の一行を説くと心得、弥陀の四十八願は称名の一行を本願とすと心得て、二心なく念仏するを深心具足というなり。

三つに廻向発願心というは無始よりこのかたの所作の諸の善根を偏に往生極

樂と祈るなり。また常に退する事なく念仏するを廻向発願心というなり。これは恵心の御義なり。この心ならば至誠心深心具足しての上に常に念仏の数遍をすべし。もし念仏退転せば廻向発願心少けたる者なり。

浄土宗の人は三心の様をよくよく心得て念仏すべきなり。三心の中に一つも少けなば往生は叶うまじきなり。三心具足しぬれば往生は無下に易くなるなり。すべて我らが輪廻生死の振る舞いはただ貪瞋痴の煩惱の絆によりてなり。貪瞋痴起らばなお悪趣へ行くべき惑の起りたるぞと心得てこれを止むべきなり。しかれどもいまだ煩惱具足の我らなれば、かくは心得たれども常に煩惱は起るなり。起れども煩惱をば心の客人とし念仏をば心の主人としつれば強ちに往生をば障えぬなり。煩惱を心の主人として念仏を心の客人とする事は雑毒虚仮の善にて往生には嫌わるるなり。詮ずるところ前念後念の間には煩惱を交うというとも、構えて南無阿弥陀仏の六字の中に貪等の煩惱を起すまじきなり。

一つ、我は阿弥陀をこそ憑みたれ、念仏をこそ信じたれとて、諸仏菩薩の悲願を軽しめたてまつり、『法華』『般若』等のめでたき経どもを悪く思い誘ふ事はゆめゆめあるべからず。万の仏たちを誘り諸の聖教を疑い誘りたらんずる罪はまづ阿弥陀の御意に契うまじければ念仏すとも悲願に漏れん事は一定なり。

一つ、罪を造らじと身を慎んでよからんとするは阿弥陀仏の願を軽しむるにてこそあれ、また念仏を多く申さんとて日日に六万遍などを繰り居たるは他力を疑うにてこそあれという事の多く聞こゆる、かよりの僻事ゆめゆめ用うべからず。まずいずれのところにか阿弥陀は罪造れと勧めたまひける。偏に我が身に悪をも止め得ず、罪のみ造り居たるままに、かかる行方ほとりもなき虚言を企み出して、物も知らぬ男女の輩を賺しほらかして、罪業を勧め煩惱を起さしむる事、かえすがえす天魔の類なり、外道の作業なり、往生極楽の仇敵なりと思ふべし。また念仏の数を多く申す者を自力を励むという事、これまた物も覚えず浅ましき僻事なり。ただ一念二念を称うとも自力の心ならん人は自力の念仏とすべし。千遍万遍を称うとも百日日日夜夜励み積むとも、偏に願力を憑み他力を仰ぎたらん人の念仏は、声声念念しかながら他力の念仏にてあるべし。されば三心を起したる人の念仏は日日夜夜時刻に称うれども、しかしながら願力を仰ぎ他力を憑みたる心にて称え居たれば、掛けても触れても自力の念仏とはいふべからず。一つ、三心と申す事は知りたる人の念仏に三心具足してあらん事は左右に及ばず。つやつや三心の名をだにも知らぬ無智の輩の念仏にはよも三心は具しそうらわじ。三心少けば往生しそろうなんやと申す事極めたる不審にてそうらえど

も、これは阿弥陀仏の法蔵菩薩の昔、五劫の間、夜昼心を砕きて案じ立てて成就せさせたまいたる本願の三心なれば、徒徒しくいふべき事にあらず。いかに無智ならん者もこれを具し、三心の名を知らぬ者までも必ず空に具せんずる様を設らせたまいたる三心なれば、阿弥陀を憑みたてまつりて少しも疑う心なくしてこの名号を称うれば、阿弥陀仏必ず我を迎えて極樂に往かせたまうと聞きて、これを深く信じて少しも疑う心なく迎えさせたまえと思ひて念仏すれば、この心がすなわち三心具足の心にてあれば、ただひらに信じてだにも念仏すればすずろに三心はあるなり。さればこそ世に浅ましき一文不通の輩の中に、一筋に念仏する者は臨終正念にしてめでたき往生どもをするは、現に証拠驗なる事なれば露塵も疑うべからず。なかなかよくも知らぬ三心沙汰して悪し様に心得たる人人は、臨終の悪くのみ在り遇いたるはそれにて誰誰も心得べきなり。

一つ、時時別時の念仏を修して心をも身をも励まし調え進むべきなり。日に六万遍を申せば、七万遍を称うればとてただあるも、いわれたる事にてはあれども、人の心様はいたく目も慣れ耳も慣れぬれば、いそいそと進む心もなく、明暮は心忙しき様にてのみ疎略になりゆくなり。その心を矯め直さん料に、時時別時の念仏はすべきなり。しかれば善導和尚も慇ろに勧めたまう。恵心の『往

生要集』にも勧めさせたまいたるなり。道場をも引き繕ひ花香をも参らせん事、殊に力の堪えんに随いて飾り参らせて、我が身をも殊に浄めて道場に入りて、あるいは三時あるいは六時などに念仏すべし。もし同行など数多あらん時は、替る替る入りて不断念仏にも修すべし。かようの事は各事柄に随いて計らうべし。さて善導の仰せられたるは、月の一日より八日に至るまで、あるいは八日より十五日に至るまで、あるいは十五日より二十三日に至るまで、あるいは二十三日より晦日に至るまでと仰せられたり。各差し合わざらん時を計らいて七日の別時を常に修すべし。ゆめゆめすずる事ともいうものにすかされて不善の心あるべからず。

一つ、いかにもいかにも最期の正念を成就して、目には阿弥陀仏を見たまつり、口には弥陀の名号を称え、心には聖衆の来迎を待ちたてまつるべし。年ごろ日ごろいみじく念仏の功を積みたりとも、臨終に悪縁にも遇い悪しき心も起りぬるものならば、順次の往生、し外して、一生二生なりとも三生四生なりとも、生死の流れに随いて苦しからん事は口惜しき事ぞかし。されば善導和尚勧めて仰せられたる様は「願わくは弟子等、命終の時に臨んで」乃「阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ」とあり。いよいよ臨終の正念は祈りもし願うべき

事なり。「臨終の正念を祈るは弥陀の本願を憑まぬものぞ」なんど申すは、善導にはいか程勝りたる学生ぞと思ふべきなり。あなあさまし、恐ろし恐ろし。

一つ、念仏は常に怠らぬが一定往生する事にてあるなり。されば善導勧めてのたまわく「一たび発心して已後、誓いてこの生を畢るまで、退転あることなく、ただ浄土を以て期とす」。またいわく「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念念に捨てざる、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に」文、といえり。かように勧めましたる事はあまた多けれどもことごとくに書き載せず。憑むべし、仰ぐべし。さらに疑うべからず。

一つ、実に実にしく念仏を行じて実に實にしき人になりぬれば、万の人を見るに「みな我が心には劣りたり。浅ましく悪ければ、我が身の善きままにはゆゆしき念仏者にてあるものかな。誰誰にも勝れたり」と思うなり。この事をばよくよく心得て慎むべき事なり。世も広し、人も多ければ、山の中、林の中に籠り居て、人にも知られぬ念仏者の貴くめでたきさすがに多くあるを、我が聞かず知らぬにてこそあれ。されば我程の念仏者よもあらじと思ふは僻事なり。大橋慢にてあれば、それを便にて魔縁の付きて往生を妨ぐるなり。されば我が身のいみじくて罪をも滅し、極楽へも参らばこそあらめ、偏に阿弥陀の願力にてこそ煩惱

をも罪業をも滅ぼし失いて、忝なく弥陀仏のてすからみずから迎え取りて極樂へ返らせまします事なれ。されば我が力にて往生する事ならばこそ我れ賢しという慢心をば起さめ。僣慢の心だにも起りぬればたちどころに阿弥陀仏の願には背きぬるものなれば、弥陀も諸仏も護念したまわずなりぬれば悪魔のためにも悩まさるるなり。かえすがえすも僣慢の心を起すべからず。あなかしこ、あなかしこ。

念仏大意 第七

末代悪世の衆生、往生のこころざしを致さんにおきてはまた他の勤あるべからず。ただ善導の釈について一向專修の念仏門に入るべきなり。しかるを一向に信を致してその門に入る人は極めて有り難し。その故は、あるいは他の行に心を染め、あるいは念仏の功德を重くせざるなるべし。つらつらこれ思うに、まことしく往生浄土の願深き心を専らにする人、有り難き故か。まずこの道理をよくよく心得べきなり。

すべて天台法相の経論も教も、その勤を致さんに一つとして徒なるべきにはあらず。ただし仏道修行はよくよく身を計り時を計るべきなり。仏の滅後、第四

の五百年にだに智慧を磨きて煩惱を断ずる事難く、心を澄まして禪定を得ん事  
 難きが故に、人多く念仏門に入りけり。すなわち道綽・善導等の浄土宗の聖人、  
 この時の人なり。いわんやこのごろは第五の五百年、鬪諍堅固の時なり。他の  
 行法さらに成就せん事難し。しかのみならず念仏におきては末法の後なお利益  
 あるべし。いわんや今の世は末法万年の始めなり。一念も弥陀を念ぜんになんぞ  
 往生を遂げざらんや。たとい我こそその器にあらずとも末法の末の衆  
 生にはさらに似るべからず。かつうはまた釈尊在世の時すら即身成仏におきては竜  
 女の外はいと有り難し。たといまた即身成仏までにあらずとも、この聖  
 道門を行い合いたまいけん菩薩声聞たち、その外の権者聖たち、その後の比丘  
 比丘尼等、今に至るまで経論の学者、『法華経』の持者、いくぞばくぞや。ここ  
 に我ら慰いに聖道を学ぶというとも、かの人人にはさらに及ぶべからず。かく  
 のごときの末代の衆生を阿弥陀仏予て解りたまいて、五劫の間思惟して四十  
 八願を発したまえり。その中の第十八の願にいわく「十方の衆生、心を至して、  
 信樂して、我が国に生まれんと欲いて、乃至十念せんに、もし生まれずといわ  
 ば正覺を取らじ」と誓いたまいてすでに正覺を成りたまえり。これをまた釈  
 尊説きたまえる経、すなわち『観無量寿』等の三部経なり。しかればただ念仏



門なり。たとひ悪業の衆生等、弥陀の誓ばかりになお信を至さずというとも、釈迦のこれを一一に説きたまえる三部経、あに一ことも虚しからんや。その上また六方十方の諸仏の証誠、この『経』に見えたり。他の行におきてはかくのごときの証誠見えず。しかれば時も過ぎ、身も堪うまじからん禪定智慧を修せんよりは、利益現在してしかも許多の仏たち証誠したまえる弥陀の名号を称念すべきなり。

そもそも後世者の中に、極楽は浅く弥陀は下れり、期するところ密厳華藏の世界なり、と心を係くる人もはんべるにや。それ甚だおおけなし。かの土は断無明の菩薩の外は入る事なし。また一向専修の念仏門に入る中にも、日別に三万遍、もしくは五万遍、六万遍乃至十万遍というとも、これを勤め已わりなん後、年ごろ受持読誦の功積もりたる諸経をも読みたてまつらん事罪になるべきか、と不審をなして欺く輩も雑われり。それは罪になるべきにてはいかでかははんべるべき。末代の衆生、その行成就し難きによりて、まず弥陀の願力に乗りて念仏往生を遂げて後、淨土にて阿弥陀如来観音勢至に値いたてまつりて、諸の聖教をも学し悟をも開くべきなり。

また末代の衆生、念仏を専らにすべき事その釈多かる中に、かつうは十方恒

沙の仏証誠したまう。また『觀經疏』の第三に善導のたまわく「自余の衆行もこれ善と名づくといえども、もし念仏に比すれば全く比較に非ず。この故に諸經の中、処処に広く念仏の機能を讚ず。『無量壽經』の四十八願の中のごとき、ただ専ら名号を念じて生ずることを得ることを明かす。また『弥陀經』の中のごとき、一日七日専ら弥陀の名号を念じて生ずることを得。また十方恒沙の諸仏、不虛を証誠したまう。またこの『經』の定散の文の中に、ただ専ら名号を念じて生ずることを得ることを標す。この例、一に非ず。広く念仏三昧を顯し畢んぬ」とあり。また善導の『往生禮讚』の中の專修、雜修の文等にも「雜修の者は往生を得ること万が中に一二なお難し。專修の者は百に百ながら生まる」といへり。これらはすなわち何事もその門に入りなんには一向に専ら他の心あるべからざる故なり。喩えば今生にも主君に任え人をあひ憑む道、他人にこころざしを分くると一向にあい憑むと等しからざる事なり。ただし家豊かにして乗物僮僕も叶い面面にこころざしを致す力も堪えたる輩は、方方にこころざしを分くといえどもその功虚しからず。かくのごときの力に堪えざる者は所所を兼ねる間、身は疲るといへどもその験を得難し。一向に人一人を憑めば貧しき者も必ずその哀を得るなり。すなわち末代惡世の無智の衆生はかの貧しき者の

ごときなり。昔の権者聖人は家豊かなる衆生のごときなり。しかれば無智の身をもて智者の行を学ばんにおきては貧しき者の得人を学ばんがごときなり。またなお譬を取らば、高き山の人も通うべくもなからん岩石を、力堪えざらん者、石の角、木の根に取り縋りて登らんと励まんは、雑行を修して往生を欣わんがごときなり。かの山の嶺より強き綱を下ろしたらんに縋りて登らんは、弥陀の願力を深く信じて一向に念仏を勤めば往生せんがごときなるべし。

また一向専修には殊に三心を具足すべきなり。三心というは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。至誠心というは、余仏を礼せず弥陀を礼し、余行を修せず弥陀を念じて専らにして専らならしむるなり。深心というは、弥陀の本願を深く信じて、我が身は無始よりこのかた罪惡生死の凡夫として生死を免るべき道なきを、弥陀の本願不可思議なるによりて、かの名号を一向に称念して疑をなす心なければ、一念の間に八十億劫の生死の罪を滅して最期臨終の時必ず弥陀の来迎に預るなり。廻向発願心というは、自他の行を真実の心の中に廻向発願するなり。この三心一つも少けぬれば往生を遂げ難し。しかれば他の行を雑えんによりて罪になるべからずといえども、なお念仏往生を不定に存じて、いささかの疑を残して他事を加うるにてはんべるべきなり。た

だしこの三心の中に至誠心を様様に心得て殊に誠を至す事を難く申しなす輩もはんべるにや。しからは弥陀の本願の本意にも違いて信心は少けぬるにてあるべきなり。いかに信力を至すという輩も、造悪の凡夫の身の信力にて願を成就せん程の信力はいかでかはんべるべき。ただ一向に往生を決定せんずればこそ本願の不思議にてははんべるべけれ。さように信力も深く善からん人のためには、かく強ちに不思議の本願を發したまうべきにあらず。この道理をば存じながら、まことしく専修念仏の一行に入る人はいみじく有り難きなり。

しかるを道綽禪師は決定往生の先達なり。智慧深くして講説を修したまいき。曇鸞法師の三世已下の弟子なり。かの曇師は智慧高遠なりといえども、四論の講説を捨てて偏に往生の業を修して、一向に専ら弥陀を念じて相續無間にして現に往生したまえり。かくのごとき道綽は講説を止めて念仏を修し、善導は雑修を嫌いて専修を勤めたまいき。また道綽禪師の勸によりて、併州の三県の人、七歳已後、一向に念仏を修すといえり。しかれば我が朝の末法の衆生、なんぞ強ちに雑修を好まんや。ただ速やかに弥陀如来の願、釈迦如来の説、道綽善導の釈を学ぶに、雑修を修して極樂の果を不定に存ぜんよりは、専修の業を行じて往生の望を決定すべきなり。かの道綽善導等の釈は念仏門の人人の事なれば左右

に及ぶべからず。法相宗におきては専修念仏門をば信向せざるかと存ずるところに、慈恩大師の『西方要決』にいわく「末法万年に余経ごとくとく滅す。弥陀の教のみありて利物偏に増す」と釈したまえり。また同じき書にいわく「三空九断の文、十地五修の教、生期分促、死路非運なり。しばらく多聞の広学を息めて、念仏の軍修を専にせんにはしかじ」といえり。しかのみならずまた『大聖竹林寺の記』にいわく、五台山竹林寺の大講堂の中にして普賢文殊、東西に对座して諸の衆生のために妙法を説きたまう時、法照、禅師、跪きて文殊に問いたてまつりき。「未来悪世の凡夫、いずれの法を行いてか永く三界を出でて浄土に生まるる事を得べき」と。文殊答えてのたまわく「往生浄土の計、弥陀の名号に過ぎたるはなく、頓証菩提の道ただ称念の一門にあり。これによて釈迦一代の聖教に多く讃むるところみな弥陀にあり。いかにいわんや未来悪世の凡夫をや」と答えたまえり。

かくのごときの要文等、智者たちの教を見てもなお信心なくして、有り難き人界を受けて往き易き浄土に入らざらん事、後悔何事かこれにしかんや。かつうはまたかくのごときの専修念仏の輩を当世に専ら難を加えて嘲をなす輩、多く聞こゆ。これまた昔の権者たち予てまず暁り知りたまえる事なり。文殊のたまわ

く「未来世において、悪衆生、西方の弥陀の号を称念して、仏の本願に依りて生死を出でて、直心を以ての故に極楽に生まる」云。善導の『法事讃』にいわく、「世尊説法の時まさに了らんとす。慇懃に弥陀の名を付属したまう。五濁増の時疑謗多く、道俗相嫌いて聞くことを用いず。修行することあるを見ては瞋毒を起し、方便破壊して競いて怨を生ず。かくのごときの生盲闍提の輩、頓教を毀滅して永く沈淪せん。大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離るることを得べからず。大衆同心に皆所有破法罪の因縁を懺悔せよ」云。『平等覚経』にいわく「もし善男子善女人ありてかくのごときらの浄土の法門を説くを聞きて、悲喜をなして身の毛豎つ事をして抜き出すがごとくするは、しかるべし、この人過去にすでに仏道をなして来たれるなり。またこれを聞くというともすべて信樂せざらんにおきては、知るべし、この人初めて三悪道の中より来たれるなり」。しかればかくのごときの謗難の輩は左右なき罪人の由を知りて、論談に値うべからざる事なり。

また十善堅く持たずして忉利都率を願わん、極めて叶い難し。極樂は五逆の者念仏によりて生まる、いわんや十悪においては障となるべからず。

また慈尊の出世を期せんにも五十億七千万歳いと待ち遠なり。いまだ知ら

ず、他方の浄土その所所にはかくのごときの本願なし。極楽は専ら弥陀の願力甚だ深し。なんぞ他を求むべき。

この度仏法に縁を結びて三生四生に得脱せんと望を係くる輩あり。この願極めて不定なり。大通結縁の人、信樂慚愧の衣の裏に一乘無価の玉を繫けて、隔生即忘して三千塵点が間六趣に輪廻せしにあらすや。たとひまた三四生に縁を結びて必定得脱すべきにても、それを待ちつけん輪廻の間の苦、いと堪え難かるべし、いと待ち遠なるべし。またかの聖道門においては三乘五乘の得道なり。この行は多百千劫なり。ここに我らこの度初めて人界の生をうけたるにてもあらず、世生生を経て如来の教化にも菩薩の弘経にもいくぞばくか遇いたてまつりたりけん。ただ不信にして教化に漏れ来れるなるべし。三世諸仏、十方菩薩、思えばみなこれ昔の友なり。釈迦も五百塵点の前、弥陀も十劫成道の前は、忝なく父母師弟とも互いに成りたまひけん。仏は前仏の教を受け善知識の教を信じて早く発心修行したまいて成仏して久しくなりたまひにける、我らは信心疎かなる故に今に生死に止れるなるべし。過去の輪転を思えば未来もまたかくのごとし。たとひ二乗の心を発すというとも、菩提心をば発し難し。如来は勝方便として行いたまへり。濁世の衆生、自力を励まさんには百千万億劫、

難行苦行を致すというともその勤及ぶところにあらず。

またかの聖道門はよく清浄にしてその器に足れらん人の勤むべき行なり。懈怠不信にしてはなかなか行ぜざらんよりも罪業の因となる方もありぬべし。念仏門においては行住坐臥寐ても寤めても持念するにその便過なくして、その器を嫌わず、ことごとく往生の因となる事疑いなし。

かの仏の因中に弘誓を立つ。名を聞いて我れを念せば総て来迎せん。

貧窮と富貴とを簡はず、下智と高才とを簡はず、

多聞と淨戒を持つとを簡はず、破戒と罪根の深きとを簡はず、

ただ心を廻して多く念仏せしむれば、能く瓦礫を變じて金と成さしむ。

といえり。またいみじき経論聖教の智者といえども、最期臨終の時その文を暗誦するに能わず。念仏においては命を窮むるに至るまで称念するにその煩なし。

また仏の誓願の験を引かんにも、薬師の十一の誓願には不取正覚の願なく、千手の願はまた不取正覚と誓いたまえるもいまだ正覚成りたまわず。弥陀は不取正覚の願を發して正覚成りてすでに十劫を経たまえり。かくのごときの誓に信を致さざらん人は、また他の法門をも信仰するに及ばず。しかればかえすがえすも一向専修の念仏に信を致して他の心なく、日夜朝暮行住坐臥に怠る事な



く称念すべきなり。専修念仏を致す輩、当世にも往生を遂ぐる聞こえその数多し。雑修の人においてはその聞こえ極めて有り難し。

そもそもこれを見てみなお横様の僻胤に入りて物難ぜんと思わん輩は、定めていよいよ憤をなして「しからば昔より仏の説き置きたまえる経論聖教、みなもて無益の徒物にて失せんとするにこそ」なんど嘲り申さんずらん。それは天台法相の本寺本山に修学を営みて名をも存し、公にも仕えて官位をも望まんと思わんにおいては左右に及ぶべからず。また上根利智の人はその限りにあらず。この心を得てよく見する人は、誤りて聖道門を殊に重くする故と存すべきなり。しかるをなお念仏に値い、兼ねて勤を致さん事は、聖道門をすでに念仏の助行に用いるべきか。その条こそかえすがえす聖道門を失うにてはほんべりけれ。ただこの念仏門は、かえすがえすも、また他の心なく、後世を思わん輩の由なき僻胤に趣きて、時をも身をも計らず、雑行を修してこの度たまたま有り難き人界に生まれて、さばかり値い難かるべき弥陀の誓を捨てて、また三途の旧里に帰りて生死に輪転して多百千劫を経ん悲しさを思い知らん人の身のためを申すなり。さらば諸宗の憤には及ぶべからざる事なり。

浄土宗略抄 第八

聖浄二門

聖道門

この度生<sup>たびしょうじ</sup>死<sup>はな</sup>を離<sup>みち</sup>るる道<sup>じょうど</sup>、浄土<sup>じょうど</sup>に生<sup>む</sup>まるるに過<sup>す</sup>ぎたるはなし。浄土<sup>じょうど</sup>に生<sup>む</sup>まるる行<sup>おこな</sup>、念<sup>ねん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>に過<sup>す</sup>ぎたるはなし。大方<sup>おほかたう</sup>憂<sup>う</sup>き世<sup>よ</sup>を出<sup>い</sup>でて仏道<sup>ぶつどう</sup>に入る<sup>い</sup>に多<sup>おほ</sup>くの門<sup>もん</sup>ありといえども、大<sup>おほ</sup>きに分<sup>わか</sup>ちて二門<sup>にもん</sup>を出<sup>い</sup>でず。すなわち聖道門<sup>じょうどうもん</sup>と浄土門<sup>じょうどもん</sup>となり。始め<sup>はじ</sup>に聖道門<sup>じょうどうもん</sup>といは、この娑婆世界<sup>しゃはせかい</sup>にありながら惑<sup>まど</sup>を断<sup>た</sup>ち悟<sup>さと</sup>を開<sup>ひら</sup>く道<sup>どう</sup>なり。これにつきて大乘<sup>だいじやう</sup>の聖道<sup>じょうどう</sup>あり、小乘<sup>しょうじやう</sup>の聖道<sup>じょうどう</sup>あり。大乘<sup>だいじやう</sup>にまた二つあり。すなわち仏乘<sup>ぶつじやう</sup>と菩薩乘<sup>ぼさつじやう</sup>となり。これらを総<sup>そう</sup>じて四<sup>し</sup>乗<sup>じやう</sup>と名<sup>な</sup>づく。ただしこれらはみなこのごろ我<sup>われ</sup>らが身<sup>み</sup>に堪<sup>た</sup>えたる事<sup>こと</sup>にあらず。この故<sup>ゆえ</sup>に道綽<sup>どうしやく</sup>禪師<sup>ぜんじ</sup>は「聖道<sup>じょうどう</sup>の一種<sup>いっしゆ</sup>は今<sup>こん</sup>時に証<sup>しょう</sup>し難<sup>がた</sup>し」とのたまえり。されば各<sup>おのおの</sup>の行<sup>おこな</sup>う様<sup>よう</sup>を申<sup>もう</sup>して詮<sup>せん</sup>なし。ただ聖道<sup>じょうどう</sup>門<sup>もん</sup>は聞き遠<sup>とほ</sup>くして解<sup>き</sup>り難<sup>がた</sup>く、惑<sup>まど</sup>い易<sup>やす</sup>くして我<sup>わ</sup>が分<sup>ぶん</sup>に思<sup>おも</sup>いもよらぬ道<sup>みち</sup>なりと思<sup>おも</sup>い放<sup>はな</sup>つべきなり。

浄土門

次に浄土門<sup>じょうどもん</sup>といは、この娑婆世界<sup>しゃはせかい</sup>を厭<sup>いと</sup>す捨てて急<sup>いそ</sup>ぎて極樂<sup>ごくらく</sup>に生<sup>む</sup>まるるなり。かの国<sup>くに</sup>に生<sup>む</sup>まるる事<sup>こと</sup>は阿弥陀仏<sup>あみだぶつ</sup>の誓<sup>ちか</sup>ひにて、人<sup>ひと</sup>の善惡<sup>ぜんあく</sup>を簡<sup>えら</sup>ばずただ仏<sup>ほとけ</sup>の誓<sup>ちか</sup>ひを憑<sup>たの</sup>み憑<sup>たの</sup>まざるによるなり。この故<sup>ゆえ</sup>に道綽<sup>どうしやく</sup>は「浄土<sup>じょうど</sup>の一門<sup>いちもん</sup>のみありて通入<sup>つうにゅう</sup>すべき路<sup>みち</sup>なり」とのたまえり。さればこのごろ生<sup>しょうじ</sup>死<sup>はな</sup>を離<sup>はな</sup>れんと欲<sup>おも</sup>わん人は証<sup>しょう</sup>し難<sup>がた</sup>き聖道<sup>じょうどう</sup>を捨<sup>す</sup>て

て、往き易き浄土を欣うべきなり。

この聖道浄土をば難行道易行道と名づけたり。譬を取りてこれをいうに「難行道は険しき道を徒歩にて行くがごとし、易行道は海路を船に乗りて行くがごとし」といへり。足なえ目しいたらん人はかかる道には向かうべからず。ただ船に乗りてのみ向いの岸には着くなり。しかるにこのごろの我らは智慧の眼しいて行法の足折れたる輩なり。聖道難行の険しき道には総じて望みを断つべし。ただ弥陀の本願の船に乗りて生死の海を渡り極楽の岸に着くべきなり。今この船はすなわち弥陀の本願に譬うるなり。

その本願といは、弥陀の昔初めて道心を発して国王の位を捐てて出家して、仏に成りて衆生を済わんと思召しし時、浄土を設けんために四十八願を発したまいし中に、第十八の願にいわく「もし我れ仏に成らんに、十方の衆生我がくに生まれんと願いて、我が名号を称うること十声に至るまで、我が願力に乗じてもし生まれずは我れ仏に成らじ」と誓いたまいて、その願を行い願して今すでに仏に成りて十劫を経たまえり。されば善導の釈には「かの仏、今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓重願虚しからず。衆生称念せば、必ず往生することを得」とのたまえり。この理を思うに、弥陀の本願を信

じて念仏申さん人は往生疑うべからず。よくよくこの理を思い解きて、いかさ

まにもまず阿弥陀仏の誓を憑みて、一筋に念仏を申して、異解の人のとかくいい

妨げんにつきて仏の誓を疑う心ゆめゆめあるべからず。かように心得て、前の

聖道門は我が分にあらずと思ひ捨てて、この浄土門に入りて一筋に仏の誓を仰

ぎて名号を称うるを、浄土門の行者とは申すなり。これを聖道浄土の二門

と申すなり。

### 安心起行

次に浄土門に入りて行すべき行につきて申さば、心と行と相應すべきなり。すなわち安心起行と名づく。

### 安心

### 三心

その安心といは心遣のありさまなり。すなわち『観無量寿経』に説いていわく「もし衆生ありてかの国に生まれんと願ずる者は三種の心を発してすなわち往生すべし。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻

向発願心なり。三心を具する者は必ずかの国に生まる」といえり。

### 至誠心

善導和尚この三心を釈してのたまわく「始めの至誠心といは、至といは真なり、誠といは実なり。一切衆生の身口意業に修せんところの解行、必ず真実心の

中になすべきことを明かさんと欲う。外には賢善精進の相を現じて内には虚仮

を懐くことを得ざれ。また内外明闇を簡わず、必ず真実を須いるが故に至誠

心」と説かれたるは、すなわち真実心の意なり。真実というは、身に振る舞い、口にいい、心に思わん事も、内虚しくして外を飾る心なきをいうなり。詮じてはまことに穢土を厭い浄土を欣いて外相と内心と相応すべきなり。外には賢き相を現じて内には悪を造り、外には精進の相を現じて内には懈怠なる事なかれという意なり。かるが故に「外には賢善精進の相を現じて内に虚偽を懐くことなかれ」といえり。念仏を申さんについて人目には六万七万申すと披露して、まことにはさほども申さずや。また人の見る折は貴げにして念仏申す由を見え、人も見ぬところには念仏申さずなんどする様なる心ばえなり。さればとて悪からん事をも外に現さんが善かるべき事にてはなし。ただ詮ずるところはまめやかに仏の御意に契わん事を思いて、内にまことを発して外相をば譏嫌に随うべきなり。譏嫌に随うが善き事なればとて、やがて内心のまことも破るるまで振る舞わば、また至誠心少けたる心になりぬべし。ただ内の心のまことにて、外をばとてもかくてもあるべきなり。かるが故に至誠心と名づく。

二つに深心といは、すなわち善導釈してのたまわく「深心といは、深く信ずる心なり。これに二つあり。一つには決定して我が身はこれ煩惱を具足せる罪惡生死の凡夫なり、善根薄少にして、曠劫よりこのかた常に三界に流転して出離

の縁なし、と深く信ずべし。二つには深くかの阿弥陀仏、四十八願をもて衆生を摂受したまう、すなわち名号を称すること下十声に至るまで、かの仏の願力に乗じて定めて往生を得と信じて、乃至一念も疑う心なきが故に深心と名づく。また深心といは、決定して心を立てて仏の教に順じて修行して永く疑いを除きて一切の別解別行異学異見異執のために退失傾動せられざれ」といえり。

この釈の意は、始めに我が身の程を信じて後には仏の誓を信するなり。後の信心のために始めの信をば挙ぐるなり。その故は往生を願わん諸の人、弥陀の本願の念仏を申しながら、我が身貪欲瞋恚の煩惱をも起し、十悪破戒の罪悪をも造るに恐れて、濫りに我が身を軽しめて却りて仏の本願を疑う。善導は予てこの疑いを鑑みて二つの信心の様を挙げて、我がごときの煩惱をも起し罪をも造る凡夫なりとも、深く弥陀の本願を仰ぎて念仏すれば、十声一声に至るまで決定して往生する旨を釈したまえり。まことに始めの我が身を信する様を釈したまわざりせば、我が心がばえのありさまにてはいかに念仏申すともかの仏の本願に契い難く、今一念十念に往生するといは煩惱をも起さず罪をも造らぬめでたき人にてこそあるらめ、我がごときの輩にてはよもあらし、なんど身の程思い知られて往生も憑み難きまで危うく覚えなましに、この二つの信心を釈したまいたる

事いみじく身に染みて思うべきなり。この釈を心得分ぬ人はみな我が心の悪ければ往生は叶わじなどこそは申しあいたれ。その疑をなすは、やがて往生せぬ心ばえなり。この旨を心得て、永く疑う心のあるまじきなり。心の善悪をも顧みず罪の軽重をも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と申せば仏の誓によりて必ず往生するぞと決定の心を起すべきなり。その決定の心によりて往生の業は定まるなり。往生は不定に思えば不定なり、一定と思えば一定する事なり。詮じては深く仏の誓を憑みていかなるところをも嫌わず、一定迎えたまうぞと信じて疑う心のなきを深心とは申しそうらうなり。

いかなる過をも嫌わねばとて法に任せて振る舞うべきにはあらず。されば善導も「不善の三業をば真実心の中に捨つべし、善の三業をば真実心の中に作すべし」とこそは釈したまいたれ。また「善業にあらざるをば敬てこれを遠ざかれ、また随喜せざれ」など釈したまいたれば、心の及ばん程は罪をも恐れ善にも進むべき事とこそは心得られたれ。ただ弥陀の本誓の善悪をも嫌わず名号を称うれば必ず迎えたまうと信じ、名号の功德のいかなる過をも除滅して一念十念も必ず往生を得る事のためたき事を、深く信じて疑う心一念もなかれという意なり。また一念に往生すればとて必ずしも一念に限るべからず。弥陀の本願の意は、

名号を称えん事もしは百年にても、十一年にても、もしは四五年にても、  
 もしは一二年にても、もしは七日一日十声までも信心を起して南無阿弥陀仏と申  
 せば必ず迎えたまうなり。総じてこれをいえば、上は念仏申さんと思ひ始めたら  
 んより命終るまでも申すなり。中は七日一日も申し、下は十声一声までも弥陀  
 の願力なれば必ず往生すべしと信じて、いくら程こそ本願なれと定めず、一念ま  
 でも定めて往生すと思ひて退転なく命終らんまで申すべきなり。  
 またまめやかに往生のころざしありて弥陀の本願を憑みて念仏申さん、臨  
 終の悪き事は何事にかあるべき。その故は仏の来迎したまう故は行者の臨終  
 正念のためなり。それを心得ぬ人はみな我が臨終正念にて念仏申したらん折  
 りぞ仏は迎えたまうべきとのみ心得たるは、仏の本願を信ぜず、經の文を心得ぬ  
 なり。『稱讚淨土經』には「慈悲をもて加え祐けて心をして乱らしめたまわず」  
 と説かれたるなり。ただの時よくよく申し置きたる念仏によりて必ず仏は来迎し  
 たまうなり。仏の来たりて現じたまえるを見て正念には住すと申すべきなり。  
 それに前の念仏をば空しく思ひなして由なき臨終正念をのみ祈る人の多くある、  
 ゆゆしき僻胤の事なり。されば仏の本願を信ぜん人は予て臨終を疑う心あるべか  
 らず。当時申さん念仏をぞいよいよ心を至して申すべき。いつかは仏の本願にも



臨終の時念仏申したらん人をもみ迎えんとは立てたまいたる。臨終の念仏にて往生すと申す事は、もとは往生をも願わずして偏に罪を造りたる悪人の、すでに死なんとする時初めて善知識の勧めに遇いて念仏して往生すところ『観経』にも説かれたれ。もとより念仏を信ぜん人は臨終の沙汰をば強ちにすべき様もなき事なり。仏の来迎一定ならば臨終の正念はまた一定とこそは思ふべき理なれ。この意をよくよく意を留めて心得べき事なり。

また別解別行の人に破られざれといは、解異に行異ならん人のいわん事につきて、念仏をも捨て往生をも疑う心なかれという事なり。解異なる人と申すは天台法相等の八宗の学匠なり。行異なる人と申すは真言止観の一切の行者なり。これらは聖道門を習い行うなり。浄土門の解行には異なるが故に別解別行と名づくるなり。

また総じて同じく念仏を申す人なれども、弥陀の本願をば憑まずして自力を励みて、念仏ばかりにてはいかが往生すべき、異功德を作り異仏にも任えて力を合わせてこそ往生程の大事をば遂ぐべけれ、ただ阿弥陀仏ばかりにては叶わじものを、なんと疑をなしい妨げん人のあらんにも、實にも、と思いて一念も疑う心なくて、いかなる理を聞くともし往生決定の心を失う事なかれと申すなり。

人にいい破らるまじき理を善導細かに釈したまえり。意を取りて申さば、たとい仏ましまして十方世界に遍く充ち満ちて光を輝かし舌を舒べて「煩惱罪惡の凡夫、念仏して一定往生すという事、僻事なり、信ずべからず」とのたまうともそれによりて一念も疑うべからず。その故は、仏はみな同心に衆生を引導したまうに、すなわちまず阿弥陀仏、淨土を設けて願を發してのたまわく、「十方衆生、我が國に生まれんと願いて、我が名号を称えん者、もし生まれずば正覺を取らじ」と誓いたまえるを、釈迦仏この世界に出でて、衆生のためにかの仏の願を説きたまえり。六方恒沙の諸仏は舌相を三千世界に覆うて虚言せぬ相を現じて「釈迦仏の、弥陀の本願を称めて一切衆生を勧めてかの仏の名号を称うれば定めて往生すとのたまえるは決定にして疑なき事なり。一切衆生、みなこの事を信ずべし」と証誠したまえり。かくのごとく一切諸仏一仏も残らず、同心に一切凡夫念仏して決定して往生すべき旨を勧めたまえる上には、いずれの仏のまた往生せずとはのたまうべきぞという理をもて、仏來たりてのたまうとも驚くべからずとは申すなり。仏なおしかり、いわんや声聞縁覺をや、いかにいわんや凡夫をやと心得つれば、一度この念仏往生を信じてん後は、いかなる人とかくい妨ぐとも疑う心あるべからずと申す事なり。これを深心とは申すなり。

三つに廻向發願心といは、善導これを釈してのたまわく「過去及び今生の身口意業に修するところの世出世の善根及び他の身口意業に修するところの世出世の善根を随喜して、この自他所修の善根をもてことごとく眞深心の中に廻向してかの国に生まれんと願うなり。かるが故に廻向發願心と名づくるなり。また廻向發願して生まるといは、必ず決定して眞深心の中に廻向して生まれることを得る思いを名づくるなり。この心深くしてなおし金剛のごとくして、一切の異見異学別解別行の人のために動乱破壊せられざれ」といえり。この釈の意は、まず我が身につきて前世にも造りと作りたらん功徳をみなことごとく極樂に廻向して往生を願うなり。我が身の功徳のみならず一切凡聖の功徳なり。凡といは凡夫の造りたらん功徳をも、聖といは仏菩薩の造りたまわん功徳をも、隨喜すれば我が功徳となるをも、みな極樂に廻向して往生を願うなり。詮ずるところ往生を願うより外に異事をば願うまじきなり。我が身にも人の身にも、この界の果報を祈り、また同じく後世の事なれども極樂ならぬ淨土に生まれんと願ひ、もしは人中天上に生まれんと願ひ、かくのごとくかれこれに廻向する事なかれとなり。もしこの理を思い定めざらん前にこの土の事をも祈り、あらぬ方へ廻向したらん功徳をもみな取り返して、今は一筋に極樂に廻向して往生せんと願うべきなり。

一切の功德をみな極樂に廻向せよといえばとて、また念仏の外にわざと功德を造り集めて廻向せよというにはあらず。ただ過ぎぬる方の功德をも今は一向に極樂に廻向し、この後なりともおのずから便に随いて僧をも供養し、人に物をも施し与えたらんをも、造らんに随いてみな往生のために廻向すべしという意なり。この心、金剛のごとくして、あらぬ解の人に教えられてかれこれに廻向する事なかれというなり。金剛はいかにも破れぬものなれば、譬に取りてこの心を廻向発願して生まると申すなり。三心のありさま粗粗かくのごとし。

「この三心を具して必ず往生す。もし一心も少けぬれば生まるることを得ず」と善導は釈したまいたれば、最もこの心を具足すべきなり。しかるにかように申し立つる時は、別別にしてことごとしきようなれども、心得解けば易く具しぬべき心なり。詮じてはまことの心ありて、深く仏の誓を憑みて、往生を願わんずる心なり。深く浅き事こそ替り目ありとも、誰も往生を求むる程の人はさほどの心なき事やはあるべき。かよふの事は疎く思えば大事に覚え、取り寄せて沙汰すればさすがに易き事なり。かように細かに沙汰し知らぬ人も具しぬべく、またよくよく知りたる人も少くる事ありぬべし。さればこそ賤しく愚かなる者の中にも往生する事もあり。いみじく貴げなる聖の中にも臨終、悪く往生せぬもあれ。

されどもこれを具足すべき様をも疾く疾く心得分けて、我が心に具したりとも知り、また少けたりとも思わんをば、構えて構えて具足せんと励むべき事なり。これを安心と名づくるなり。これぞ往生する心のありさまなる。これをよくよく心得分くべきなり。

起行

五種正行

正助二行

次に起行といは、善導の御心によらば「往生の行多しといえども、大きに分かちて二つとす。一つには正行、二つには雑行なり」。正行といは、これにまた数多の行あり。読誦正行、觀察正行、禮拜正行、称名正行、讚歎供養正行、これらを五種の正行と名づく。讚歎と供養とを二行と分かつ時には六種の正行とも申すなり。この正行につきて、総ねて二つとす。一つには、「一心に専ら弥陀の名号を称えて、行住坐臥に夜昼忘るる事なく、念念に捨てざるを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に」といいて、念佛をもて正しく定めたる往生の業に立てて「もし礼誦等によるをば、名づけて助業とす」といいて、念佛の外に阿弥陀仏を礼し、もしは三部経を読み、もしは極樂のありさまを観ずるも、讚歎供養したてまつる事も、みな称名念佛を助けんがためなり。正しく定めたる往生の業はただ念佛ばかりというなり。この正と助とを除きて他の諸行をば、布施をせんも、戒を持たんも、精進ならんも、禪定ならんも、か

雜行

くのごとくの六度万行、『法華經』を読み、眞言を行い、諸の行をばことごとくみな雜行と名づく。

ただ極樂に往生せんと欲わば一向に称名の正定業を修すべきなり。これすなわち弥陀本願の行なるが故に。我らが自力にて生死を離れぬべくば必ずしも本願の行に限るべからずといえども、他力によらずば往生を遂げ難きが故に弥陀の本願の力を籍りて一向に名号を称えよと善導は勧めたまえるなり。

自力といは我が力を励みて往生を求むるなり。他力といはただ仏の力を憑みたてまつるなり。この故に正行を行ずる者をば專修の行者といひ、雜行を行ずるをば雜修の行者と申すなり。「正行を修するは心常にかの国に親近して憶念間なし。雜行を行ずる者は心常に間斷す。廻向して生まるることを得べしといえども疎雜の行と名づく」といいて、極樂に疎き行といえり。また「專修の者は十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながら生まる。何をもての故に。外に雜縁なくして正念を得るが故に。弥陀の本願と相應するが故に。釈迦の教に順ずるが故なり。雜修の者は百人には一二人生まれ、千人には四五人生まる。何をもての故に。弥陀の本願と相應せざるが故に。釈迦の教に順ぜざるが故に。憶想間斷するが故に。名利と相應するが故に。みずからも障え、人の往生をも障う

るが故に」と釈したまいたれば、善導を信じて浄土宗に入らん人は、一向に正行を修して日日の所作に一万二万乃至五万六万十万をも器量の堪えんに従いて、いくらなりとも励みて申すべきなりとこそ心得られたれ。それにこれを聞きながら念仏の外に余行を加うる人の多くあるは心得られぬ事なり。その故は善導の勧めたまわぬ事をば少しなりとも加うべき道理ゆめゆめなきなり。勧めたまえる正行をだにもなお物憂き身にて、いまだ勧めたまわぬ雑行を加うべき事はまことしからぬ方もありぬべし。また罪造りたる人だにも往生すれば、まして功德なれば『法華経』なんどを読まんは何かは苦しかるべきなんど申す人もあり。それらは無下に汚き事なり。往生を助けばこそいみじからめ、妨げにならぬばかりをいみじき事として加え行わん事は何かは詮あるべき。悪をば、されば仏の御心に好みて造れとや勧めたまえる。構えて止めよとこそ誡めたまへども、凡夫の習、当時の惑に引かれて悪を造る事は力及ばぬ事なれば、慈悲を起して捨てたまわぬにこそあれ。まことに悪を造る人のように余行どもの加えたがらんは力及ばず。ただし経なんどを読まん事を悪造るにいい並べて、それも苦しからぬばましてこれもなんどといわんは不便の事なり。深き御法も悪く心得る者に遇いぬれば、却りて物ならず、あさましくかなしき事なり。ただあらぬ解の人のともか

くも申さん事をば聞き入れずして、進みぬべからん人をば拵え勧めむべし。解違いてあらぬ様ならん人などに論じあう事などは、ゆめゆめあるまじき事なり。ただ我が身一人まずよくよく往生を願いて念仏を励みて、位高く往生して、急ぎ還り来たりて人人を引導せんと思うべきなり。

また善導の『往生礼讃』に「問いていわく、阿弥陀仏を称念礼観するに、現世にいかなる功德利益がある。答えていわく、阿弥陀仏を称念すること一声すれば、すなわち八十億劫の重罪を除滅す。また『十往生経』にいわく、もし衆生ありて阿弥陀仏を念じて往生を願う者は、かの仏すなわち二十五の菩薩を遣わして行者を護念したまう。もしは行、もしは坐、もしは住、もしは臥、もしは夜、もしは昼、一切の時、一切の処に、悪鬼悪神をしてその便を得しめたまわずと。また『観経』にいうごときは、阿弥陀仏を称念してかの国に往生せんと欲せば、かの仏すなわち無数の化仏無数の化観音勢至菩薩を遣わして行者を護念したまう。前の二十五の菩薩の百重千重に行者を圍繞して行住坐臥を問わず、一切の時処に、もしは昼、もしは夜、常に行者を離れたまわず」と。またいわく「弥陀を念じて往生せんとする者は常に六方恒沙等の諸仏のために護念せらる。かるが故に護念経と名づく。いますでにこの増上縁の誓願の憑むべきあり。諸



の仏子等いかでか心を励まざらんや」といえり。かの文の意は弥陀の本願を深く信じて念仏して往生を願う人をば、弥陀仏より始めたまつりて十方の諸仏菩薩観音勢至無数の菩薩、この人を圍繞して行住坐臥夜昼をも嫌わず影のごとくに添いて、諸の横悩をなす悪鬼鬼神の便を祓い除きたまいて、現世には横様なる煩なく安穩にして、命終の時は極樂世界へ迎えたまうなり。されば念仏を信じて往生を願う人、故に悪魔を祓わんために、万の仏神に祈をもし慎をもする事はなじかはあるべき。いわんや仏に歸し、法に歸し、僧に歸する人には、一切の神王、恒沙の鬼神を眷屬として、常にこの人を護りたまうといえり。しかればかくのごときの諸仏諸神、圍繞して護りたまわん上は、またいづれの仏神かありて惱まし礙ぐる事あらん。また宿業限りありて受くべからん病はいかなる諸の仏神に祈るともそれによるまじき事なり。祈によりて病も息も命も延ぶる事あらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。いわんやまた仏の御力は、念仏を信ずる者をば転重軽受といいて、宿業限りありて重く受くべき病を軽く受けさせたまう。いわんや非業を祓いたまわん事ましまさざらんや。されば念仏を信ずる人は、たといいかなる病を受くれどもみなこれ宿業なり、これよりも重くこそ受くべきに仏の御力にてこれ程も受くるなりとこそは申す事なれ。我らが悪業深

重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすら遂げさせたまう。ましてこの世に  
 いか程ならぬ命を延べ病を助くる力ましまさざらんやと申す事なり。

されば後生を祈り本願を憑む心も薄き人は、かくのごとく圍繞にも護念にも預  
 かる事なしとこそ善導はのたまいたれ。同じく念仏すとも、深く信を発して穢土  
 を厭い極樂を欣うべき事なり。構えて意を留めてこの理を思い解きて、一向に  
 信心を致して努めさせたまうべきなり。これらはかように細かに申し述べたるは、  
 私のごとは多くして謬やあらんと悔り思召す事ゆめゆめあるべからず。偏に  
 善導の御ことばを学び古き文釈の意を抜き出して申す事なり。疑をなす心なく  
 て、構えて意を留めて御覽じ解きて心得させたまうべきなり。あなかしこ、あ  
 なかしこ。この定に心得て念仏申さんに過ぎたる往生の義はあるまじき事にて  
 そうろうなり。

本にいわく、この書は鎌倉の二位の禪尼の請によて、記し進ぜらるる書也云云  
 黒谷上人語灯録卷第十一